

羊たちは彼の声を聞く

—ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [I-3]—

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成10年11月4日受理)

Τὰ πρόβατα τῆς φωνῆς αὐτοῦ ἀκούει.

—Die Terminologie λαλεῖν in der Joh 9-10 [I-3]—

Kanji SASAKI

*Beauftragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
Kuraschiki, 701-0193, Japan
(Received on November 4 1998)*

概 要

羊の囲いの比喩説話(10,1-6)に乗って, ヨハネ版バシレイアが広がっている。しかしそれは力づくで襲われており, 盗人, 強盗がそれを奪い取ろうとしている。これら強奪行為の直中に羊飼いの呼び声が響きわたる。この声は彼のすべての羊を連れ出し導いて行く。地上を旅するこのバシレイア, 一つの群とひとりの羊飼いは, この上もなく過酷な喪失を迎えようとしている。一匹の羊の喪失ではなく, 羊飼いやそのものの喪失を。

羊飼いの呼び声を聞き分けることのできる者, その者はその存在において子と同型なのである。子は〈自分から〉は何一つ持たない。子の声は鳴り響いて消えた。それでいて彼の声を聞くことができる者, 彼は父と子の間の愛の直中に, 現在終末論の意味で, 生きているのである(14, 20-24)。

Resümee

Auf der Bildrede vom Schafstall(10,1-6) dehnt sich die „johanneische“ βασιλεία aus, die aber Gewalt leidet und die die Diebe und Räuber an sich reißen. Mitten unter Gewaltstreichen tönt der Hirtenruf, der alle seine Schafe läßt hinaus und führt her. Diese auf der Erde reisende βασιλεία, eine Herde und ein Hirte, ist auf dem Wege, einen härtesten Verlust zu erleiden: die Verlust nicht eines Schafes sondern des Hirten selbst.

Wer den Hirtenruf hören kann, der ist einig in seinem Sein mit dem Sohn, der nichts 〈von sich her〉 hat. Seine Stimme tönte und verschwand. Und wer dennoch den Ruf hören kann, der lebt, im Sinne der präsentischen Eschatologie, in der Mitte der Liebe zwischen dem Vater und dem Sohn(14,20-24).

第1章 下からのアナログア

第1節

10章の *σχίσμα*——イエスの言葉 *λόγοι* をめぐって「ユダヤ人」たちの間に分裂が走ったこと。小論『分割』の冒頭においてわれわれは、*σχίσμα* の場面に発生した対立項は〈イエスの業から〉と〈イエス・メシアの概念から〉であることを確認した。そしてその際、イエスの言葉を聞く者をしてこの対立両項のいずれかに向かわせる所以のものは何かとわれわれは問い、その当のものがイエスの言葉 *ῥῆμα* そのものに顕現しているとみなしうると考えたのである。つまりそれはイエスの言葉の権威ある声・音・響き *φωνή* であり、これは神の言葉のデュナミスのいまこへの現臨であるとわれわれは受け止めたのである。この声の投げかける作用効果を受容する仕方に二通りあった。一方でイエスの業の力に巻き込まれて〈自分から〉が〈神から〉に転倒された者に対しては、この声はまさに神のデュナミスとしてこの者の存在そのものを共振させるのであり、他方イエスの人物をメシアとしては信じ得ない者にはそれは悪霊の叫びとしてしか聞こえないのであった。

以上は、分裂、悪霊が言及された箇所のいくつかを切断してみてもわれわれが得た知見であるが、その中には、物語のこれら断面からわれわれがたんに予想しているにすぎないものも含まれている。物語の切断面から得られた知見を物語り過程の中に置き戻してなお、一貫したものが主張し得るかどうかを、声・音 *φωνή* について調べておきたい。

われわれが言葉・声についての「三段叙述」と呼んだ5,24-28を想起されたい（『構成』第1章第3節末尾）。これが語られている段落5,19-30（「B：イエス項」）では人の子・イエスの〈自分から〉は全く存在せず、全て〈神から〉であることが、まさに天次の、語られていた。

われわれはここでのイエスの言葉、神の子・人の子の声はまさに〈神から〉のデュナミスであると受け止める以外にない。

次に注目すべきは、人の子の言葉・声の三項組、A：聞く（聞けとの戒め）、B：永遠の命の授与（祝福）、B'：裁き（呪い）が三回反復されたということである。反復の最初ではこの三項組が現在実現しているということが語られ、反復の最後では、三項組が実現する「時が来る」と語られた。そのことをもって、物語時間は未来終末論の〈期待されるべき時間が満たされていく過程〉として開始し、実はそれは、〈未来終末論が現在終末論へと転倒される過程〉として進行していったのである。人の子・イエスの言葉において神の言葉が聞こえる／聞こえないの狭間に出現する祝福／呪いは、終末論的未来を予表するものとして開始し、終末論的現在を直下に孕みこれを充溢させていくものとして進行していくのである。人の子・イエスの言葉・声が具える祝福／呪いの二肢的意義が、予表的にそして徐々に現代的に、地上を歩む形が、とりもなおさず分裂の進行であった訳である。既にわれわれは小論『分割』「補論」にて、イエスの言葉が時と共に分裂を進めていく具体的な姿が7章冒頭に記述されている次第を確認した。それは6章末で、イエスに信ずる者たちの中枢部で既に発生していたことの拡大であり、都エル

サレムでの公然化なのである。

6:59 これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話された εἶπεν ことである。

6:60 ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った εἶπαν。

「実にひどい、この話はὁ λόγος οὗτος。だれがしたいものか、彼に聞く αὐτοῦ ἀκούειν ことを。」

6:61 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいている γογγύζουσιν のに気づいて言われた εἶπεν、「あなたがたはこのことにつまずくのか。」

6:62 それでは見るならば εἰν οὖν θεωρήτε、人の子がもいた所に上るのを……。

6:63 命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。

わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。

τὰ ῥήματα ἃ ἐγὼ λελάληκα ὑμῖν πνεῦμά ἐστιν καὶ ζωὴ ἐστί.

6:64 しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」

イエスは最初から知っておられたのである、

信じない者たちがだれであるか、

また、御自分を裏切る者がだれであるかを。

6:65 そして、言われた ἔλεγεν。「こういうわけで、わたしはあなたがたに言ったのだ εἶρηκα、

『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と。」

6:66 このために、弟子たちの多くが離れ去り、

もはやイエスと共に歩まなくなった。

ヨハネの物語にあって分裂の始元は根本的には「イエスに信じているつもりの方たちの内部」にあるのだということであろうか。

紛れもなく V61-62 と V65 とは枠をなしている。その内部は二部に構成されここに明確に人の子の言葉の祝福／呪いが語られていて、この語り方が弟子たちを分割しているのである。ところで V65 を聞いた者は、この祝福／呪いの直中に父なる神御自身の裁きが現臨しているのだと理解できよう——上記段落 5, 19-30 (「B: イエス項」) 末尾参照。つまり人の子の言葉を聞くことを得て祝福された者、こうして「わたしのもとに来ることができ」た者は、先行する「父からの許し」、神のデユナミスを賜っている (V34-46) のだと受け止め得よう。

しかしこの語りは (明らかに否定文を提示するためにこそ) 対偶命題で語られている。否定文「わたしのもとに来ることができない」とは、確立された語法であって、〈イエスは十字架に上げられ人々は彼を見失ってしまい、再会が可能となる場合があるとしても、「捜すこと」の過酷な遍歴の後をはじめのことであること〉を語るものである (7, 33-36, 8, 21-24, 13, 33-38, Vgl. 14, 28, 16, 4-24)。つまりこの語法はイエスの十字架上の死を通じた救いを含意しているのである。そのことを外枠 V65 の否定文は——V44 の論理構造をもう一度浮かび上がらせるようにして——強調しているのである。こうして後部の外枠 V65 はイエス上昇の道を象徴していて、全体を閉じるこの外枠を、全体を開始する外枠 V61-62 の後半 V62 が指し示していることがわか

る。このことによってさらに、自らの命を捨てるほどまでに人々を愛して父の命令の下に来臨されたイエスの降下の道を外枠のV61bは象徴していることが——テキストの後方から照射されていよいよ鮮明に——理解できる。

こうしてみると上掲引用部は、イエスの十字架を前にして四散する弟子たちの予表であると考えられる(未来終末論の地平でのそれであることに注意)。そのことを6,62が何よりも雄弁に語っている(イエスが上げられるのを見るの「見る」が *θεωρεῖν* となっていることに注意!)。彼らは、しかもイエスの弟子である彼らは(一枚皮をめくってみれば、わたしはなおさら)、〈天から〉のパンがそれを通して与えられるその十字架からの声を嘲笑し罵倒しているのである。するとここにあるのは、弟子の四散というよりもむしろ、(8章末で「イエスに信じているつもりユダヤ人」によるイエス殺害が implicit に出来したが、それよりもっと根元的な意味で) 弟子によるイエス殺害の予表である。聞く者は自分より他の誰かが言及されているのだと思い描くことはできない。イエスの言葉は霊であり永遠の生命(を与えるもの)であるがゆえに、逆にこれに真に聞いたと見なされ得ない者については、この者を(i.e. わたしを)裁いてイエス殺害の先頭分子へと変貌させるのである(イエスの言葉の二肢性)。

5-10章の物語のポテンシャルティは、「父と子の一致」が浮き彫りにされていくことである。イエスが父の業を次々と遂行され、その都度イエスはその言葉をもって、子は〈父から〉であることを強く告知される。こうして父と子の一致がより完成したかたちをとって出現していく。まさにそれにつれて、人々の間の分割はより深刻に、そして守旧的「ユダヤ人」とイエスとの対立はより激越となっていくのである。この意味で、人の子・イエスの言葉が——その祝福/呪いの二肢的意義によって——地上にますます深く刻み込んでいく亀裂の進展は、この物語過程のまさに通奏低音そのものなのである。それは5,30から既に開始していたのである。

第2節

5章から発出した亀裂の進展が5-10章の物語の終結部はおろか、さらにこの物語の壁を越えて、11-12章の物語へと突入する姿を下に見ておこう(以下は拙論『エイドー』212Anm20からの修正転記を含んでいる)。

[A:約束] 5:28 驚いてはならない、時が来る、

墓の中にいる者は皆、聞くだろう彼の声を、

5:29 そして出て来るであろうところの、

善を行った者は復活して命を受けるために、

悪を行った者は復活して裁きを受けるために。

5:28 μὴ θαυμάζετε τούτο, ὅτι ἔρχεται ὥρα

ἐν ᾗ πάντες οἱ ἐν τοῖς μνημείοις ἀκούσουσιν τῆς φωνῆς αὐτοῦ

5:29 καὶ ἐκπορεύονται,

οἱ τὰ ἀγαθὰ ποιήσαντες εἰς ἀνάστασιν ζωῆς,

οἱ δὲ τὰ φαῦλα πράξαντες εἰς ἀνάστασιν κρίσεως.

[B：しるしの業] 11:43 こう言ってから大声で叫ばれた、「ラザロ、出て来なさい」と。

11:44 出て来た、死んでいた人が、

手と足を布で巻かれ、顔は覆いで包まれて。

言われた、人々にイエスは、「ほどいてやって、行かせなさい」と。

11:43 καὶ ταῦτα εἰπὼν φωνῇ μεγάλῃ ἐκραύγασεν, Λάζαρε, δεῦρο ἔξω.

11:44 ἐξῆλθεν ὁ τεθνηκὼς

δεδεμένος τοὺς πόδας καὶ τὰς χεῖρας κειρίαις,

καὶ ἡ ὄψις αὐτοῦ σουδαρίῳ περιεδέδετο.

λέγει αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς, Δύσατε αὐτὸν καὶ ἄφετε αὐτὸν ὑπάγειν.

[A'：総括] 12:17 証しをしていた、群衆は、

イエスと一緒にいたところの、あの時に、

イエスがラザロを呼び、墓から外へ、

彼をよみがえらせた、死者の中から外へ

12:17 ἐμαρτύρει οἶν ὁ ὄχλος

ὁ ὢν μετ' αὐτοῦ ὅτε

τὸν Λάζαρον ἐφώνησεν ἐκ τοῦ μνημείου

καὶ ἤγειρεν αὐτὸν ἐκ νεκρῶν.

12:18 次の理由で群衆はイエスを出迎えた、

聞いた 聞くからである、

イエスがこのようなしるしをなさった 業をなすこと。

12:19 そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った、

「君たちは見ている 見て、自分たちが何もなしえない ことを見よ。世はあの男について行った 見よ。世はあの男について行った 見よ。」

「君たちは見ている 見て、自分たちが何もなしえない ことを見よ。世はあの男について行った 見よ。世はあの男について行った 見よ。」

[A：約束] で「彼の (i.e. 神の子・人の子) 声 φωνή」が、「墓の中にいる者」を「復活して命を受けるために」必ず「出て」来させると約束されていたのは5章でのことであった (この「声」のイメージ・スキーマは墓の中、声掛け、聞く、命賦与、連れ出す)。まさにこの声、声のなす [B：しるしの業] として、あの通奏低音の中を遙々と、11章のラザロの墓場にまで、届いたのである！しかしイエスの言葉の二肢的意義においてそれは届いたのである！この言葉・声はラザロを構成員とするイエス信徒派に祝福をもたらしたが、敵対派には呪いを、

つまりイエス殺害に最終的に決起するという父と子の愛に敵対する大罪への転落を、もたらした。

ところでヨハネの物語においては [A':総括] 中の証しの言葉もファリサイ派の無念憤慨の辞も、ある不思議な仕方で、あの神の子・人の子の声 $\phi\omega\nu\eta$ と結びついているのである(ヨハネの鏡! これらの言葉は、しるしの業を現出して鳴り響いた神の声の反響、傍らでの戯れ Beispiel として、晴れ晴れとあるいは陰鬱に鳴り続けるのである)。

声そのものが救いの業であるラザロ復活物語にみられる、行為としての声の実現(究極の発話内行為)。このことの基盤をなしているフレームを、その骨格(読者の主体化の解析未了)において取り出してみよう。

1] 物語の次元が現在終末論に立っていること, 2] セッティングとしての否定的状況, 3] landmark としての墓場, ないし否定的行為, 4] 言葉授与者, 受領者の我・汝関係(存在の同型性), 5] 言葉授与者の声 landmark の中に達し, この声に引かれて言葉受領者は landmark から外へ出る, 6] 読者はこの入り出る動きに想像力を合わせること(mental scanning)によって舞台に巻き込まれていく

—このフレームはそのまま, 10章冒頭の「羊の囲いのたとえ」のそれであったのである。むしろ5,28が約束していた「彼の声」は, 9-10章全体が形作る ω 形の結構の頂点に位置するこの説話の中で, 初めて高らかに響きわたったのであり(次頁参照), ここで読者が聞き及んだ声こそがラザロの墓場へ注ぎ込まれたのである。

これに関して, 決して忘れ去ってはならない経過がある。

5章第2段落, 「B: イエス項」中の言葉・声についての三段叙述の終結部で, 未来終末論の地上に降り立たれたイエスは終末論的未来を指して, 必ず「時が来る」と約束されたのである。「その時には」と彼は言われた。

墓の中にいる者は皆, 聞くだろう 彼の声を,

そして出てくるであろう

$\epsilon\nu\ \eta\ \acute{\alpha}\nu\tau\epsilon\varsigma\ \omicron\iota\ \epsilon\nu\ \tau\omicron\iota\varsigma\ \mu\eta\nu\mu\epsilon\iota\omicron\iota\varsigma\ \acute{\alpha}\kappa\omicron\upsilon\sigma\sigma\omicron\upsilon\sigma\iota\nu\ \tau\eta\varsigma\ \phi\omega\nu\eta\varsigma\ \alpha\iota\tau\omicron\upsilon$

καὶ ἐκπορεύσονται,

5,28-29

次に同章第3段落, 「C: ヨハネ項」で, この未来終末論へと人の子が降り立たれることから出発する物語が, 何をメルクマールにして, 未来終末論そのものを転倒していく歩みを進めるのかが予告されている(次節参照)。物語の出発点のこの段階でイエスは, 「まだ」と語られている

あなたたちは, まだ父のお声を聞いたこともなければ, お姿を見たこともない。

5,37

この「まだ…ない」は, 「かの時」の遠さを, 聞き手にそして読者に印象づけるものである。果たせるかな, その後は聞き手も読者も, $\phi\omega\nu\eta$ という言葉・音を全く聞かなくなる。それは5,37以降, ぱったりと途絶えてしまう。読者は(われわれは), 登場人物たちの群の中でイエスの言葉を受けて現象する分裂という振る舞いを手がかりにして, $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu,\ \rho\eta\mu\alpha,\ \acute{\epsilon}\kappa\rho\alpha\acute{\xi}\epsilon\nu,\ \acute{\epsilon}\iota\pi\epsilon\nu$

という術語の中に神の声・そのデュナミスが臨在していたのであろうことを推察してきたのである。端的にそれを *φωνή* という言葉・音において聞くということは、6章から9章に至るまで決してなかったのである。

ところが10章に入って突然イエスの口から、*της φωνης αυτού* (彼の声を) という言葉をわれわれは聞いたのである。

門番は羊飼いは門を開き、羊は彼の声を聞く。

羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。

τούτω ὁ θυρωρὸς ἀνοίγει, καὶ τὰ πρόβατα *της φωνης αυτού* ἀκούει
καὶ τὰ ἴδια πρόβατα *φωνει* κατ' ὄνομα καὶ ἐξάγει αὐτά.

10,3

της φωνης αυτού ἀκούει (聞く), この言葉, この響き!

「羊の囲い」の比喩説話を今語られているイエスのこの言葉を通じて、遙か以前の(本小論ではすぐ上にもう一度記述してある)イエスの約束、「かの時に、必ず諸君は聞くであろう」5,28と言われたことを今想起する読者、この読者のもとに神の子の声・神の声 *φωνή* は確実に届いたのである。

あそこでのイエスの言葉はこうだった、聞くだろう *ἀκούσουσιν* *της φωνης αυτού*。

ここでのイエスの言葉は *της φωνης αυτού* を「*ἀκούει* (聞く)」と現在形となっているのである。

あの約束のなかでの「かの時」とは「今」である、比喩説話の中に「彼の声を聞いている」「今」である、イエスはこのように言われているのである! イエスの説話の中にわれわれは「彼の声を聞いている」だろうか? イエスの言葉の二肢的意義は逃げようもなくわたしに迫ってくる。

比喩説話を終結する語り手の言葉が音を強調する術語 *λαλεῖν* を使って語るとき、そこでは明らかに次のことが告げられているのである。「ファリサイ派の人々」はこの声・音 *φωνή* を聞き漏らしたのだということ、彼らは「彼の声を聞いている *της φωνης αυτού* *ἀκούει*」のではなかったということ。

10:6 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、

10.6 Ταύτην τὴν παροιμίαν εἶπεν αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς,
彼らは分からなかった、話されたことが何であったか。

ἐκεῖνοι δὲ οὐκ ἔγνωσαν τίνα ἦν ἢ ἐλάλει αὐτοῖς.

術語 *φωνή* の出現の仕方、そしてこの術語を目的語とする *ἀκούω* の未来形(5,28)から現在形(10,3)への推転、テキスト上でのこのような経過は、現在終末論→未来終末論→現在終末

論という物語過程による未来終末論の包摂転倒という、ヨハネのテキスト戦略を雄弁に語っている。ここに新たな次元で現在終末論が、テキスト内部に、確立したのである。

第3節

ではなぜ5章-10章の物語において、分裂は〈イエスの業から〉と〈イエス・メシアの概念から〉との対立として進展して行くのか、このことが問われるべきである。

先ず新旧の普遍性の交替現象は、新しい普遍性を担う基盤となる事実性が古い普遍性の包摂力を突破することによる。これは一般的に生じる事態であり、その限りでは、ヨハネの物語の事実性対概念の構図はこのことを即自的に表現しているにすぎないともいえよう（事実性をどう規定するかが問題ではあるが）。

われわれの長大な物語の対立の進展過程をもう少し詳しく見つめれば、イエス運動敵対派のエートス次元（これもある種の事実性である）で牢固として抜きがたい確信があることが極めて重要であることがわかる——その確信とはこうである、たとえメシア来臨が出来たとしても、そのメシアは〈この〉イエスでは断じてあり得ない！

言葉と声の事実性ということの考察をある程度進めてきたこの段階で、われわれは小論『分割』第1章第1節末尾で言及した「知ること」の系列について、背景となる事実性という視野を踏まえて、議論を展開していくことが出来る。

敵対派の、イエスの生まれも育ちも知っているという思いとしての「知ること」(=WI)、ならびに聖書研究に熟達している自分たちこそこの地上世界を最も根本的に理解できているのだという確信としての「知ること」(=WII)。

10章末尾に登場する、「父と子の相互内在を知るに至り知り続ける」とされた「知ること」(=WIII)。

ヨハネ共同体にとっての最高の「知ること」である WIII はその背後に、WII の中から出発してこれを食い破りこれを WIII の下に逆包摂していくおのれの形成史を、WII' として蓄積して来たのである。神の声のデュナミス(=父からの業が指し示すもの)が沈殿してきた新しい共同の生活世界の「知ること」がこれである。

われわれの長大物語の出発点である5章は WII と WII' を鮮明に対比していたのである（もちろん後者は「予告」として）。この章は「A：しるしV1-18」、「B：イエス項V19-30」、「C：ヨハネ項V31-47」と区分できるが、B項は「上からの光」を、C項はこれを証する「下からの光」を、それぞれそのテーマとしている（3章もこの両項を備えている）。ところで小論『構成』第1章第3節で、われわれはこのB項で〈上からのアナロギア〉が勧められていると規定した。物語が未来終末論の生活世界に降下したからには、読者にとって「先なるもの」が〈聖書の語る〉神・父であり、この「上から」、子を推論することになるからであった。聖書の語る父が「先なるもの」であるというタイプの「知ること」はまさに上掲 WII なのである。

次に5章C項と10章「C：光と闇」前半の「C₁：下からのアナロギアV22-30」を比較対照されたい。主に「父からの業」に注目してみれば、〈下からのアナロギア〉について両者が呼応しあっていて、前者がその「予告」であり後者がその「総括」となっていることが明らかとなる。そしてこの〈下からのアナロギア〉を通じて形成される「知ること」こそが上掲 WII'なのである。こうしては WII'はすでに5章C項で潜在的・予告的に開始していたのである。「知ること」の展開という切り口でわれわれの長大物語を読み直してみると、上記 WI の始元は明らかに「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から下ってきた』などというのか」6,42である。そしてこの WI の内容は7,15の聖書知識という背景に埋め込まれて7,27では既に WII となっていて、イエスの語りへの「ユダヤ人」たちの態度を単純な疑問から疑惑へと転化させている。WI の内容が WII の包摂力を脅かし始めたことを告げる事件が8,19であり、後者が対抗的にその力を飛躍させた出来事が9,24,10,33である。WI の内容がどれほどヨハネ神学にとって重いものであるかは7,25-29の奇妙な議論の中に露呈している。

A. イエスはメシアではないのか B しかしわたしたちは彼の出身を知っている

B' あなたたちはわたしの出身を知っている C わたしはある方から遣わされた者である

拙論『セオーライン』でわれわれが定式化し、同『Joh 8,52-53』でその一層広範な所在を確認した、 $A \rightarrow B \cdot B' \rightarrow C$ という「四歩で三段進むトリアーデ」のレトリック形式。上の論法はそれをわれわれが発見する出発となったものである。知的廉直というものを失った無理な議論とも見えかねないこの論法をよくみつめてみると、イエスは誰であるかをヨハネ共同体が提示する際の最初から最後に至るまで最も強固な壁となっていたものこそ、WII によって生み直され強化された WI であることがここに示されているように見える。われわれはここでも、ヨハネが同じ表現を反復するとき、そこに読者を巻き込むひとつの重大な言語行為がなされたのである、と解する。つまり二つの表現にはそれぞれ別の内容が想像力の火種のようにして含意されているが、書き手は同じ表現の反復で含意の内容を転換させたのであり、そしてそのとき読者は、それがどのようにであるかを、自分なりに制作的に想像力を燃え立たせて発見するよう——高低の隔たりは限りないとしてもイエスに連なろうとする兄弟の強制力で——挑発されたのである、とわれわれは理解する²。

イエスにおけるメシア性の主張に対し、敵対派は WI を反論の事實的基盤として WII を振りかざして、その権利を問う。これに対し、イエス（信従派）は権利問題でのみ空中戦を挑むことは出来ない。父からの業の継続により神の声のデユナミスを指し示しその沈殿のなかで形成される WII' が闘争を導く論理となる。メシアの旧概念に事実性を突きつけるとしても、イエス信従派が神の子・人の子の新概念の彫琢、形式性の獲得、を怠っているわけではない。しかしそれは奥義に関わることであり、「この新概念のもとでの、わたしがな お信じられなくても、わたしの業を信じなさい」と事実性強調へと大きく回帰した次元が10章「C：光と闇」後半の「C₂：相互内在V31-39」の最後でイエスが語られた意味なのである³。

9章でイエスによって癒やされた人が「ユダヤ人」からの第二査問において決然として主張したあの「下から」の宣言, ここから開始する「経験の道」, それを受けて「父と子の一体」を知ることに向かう10章「C:光と闇」前半の「C₁:下からのアナログア」の道。「イエスの人物評価よりも業評価」として形成される WII'としてのこの「知ること」に対して, 「父と子の相互内在」という WIIIとしての「知ること」は14章においてもなお実現された「知ること」ではなく, WII'を養いつつある信仰の勢位における, 「信じること」の客体であり続けるのである(14, 6-12)。

第4節

いよいよわれわれの長大物語の最初に予告され, その最後に総括された「下からのアナログア」の骨格が考察されるべきである。

この「総括」には, 直前9章の, 癒やされた人の「第二査問物語」という「経験」が前提されている。9章後半の, 「弟子の上昇の道」であるこの箇所は, 教会の危機とその知の形成史という背景をも背負う弟子論である。これの全体的な考察は「拡大された語用論」として, 他のキリスト教文書との文脈の中でしか遂行し得ない。われわれはそれを小論『諸起源』にて準備中である。今はわずかのトピックを結ぶだけで「経験の叙述」の要約とみなし, 「総括」の前提を確認するにとどめる。

AA. 癒やされた人の, 「下から」の宣言

^{9:24}さて, ユダヤ人たちは, 盲人であった人をもう一度呼び出して言った。

「神に栄光を帰しなさい。わたしたちは知っている, あの方が罪人であるということ。

ἡμεῖς οἶδαμεν ὅτι οὗτος ὁ ἄνθρωπος ἁμαρτωλὸς ἐστίν·

^{9:25}彼は答えた。「あの方が罪人かどうか, わたしは知らない。

一つだけわたしは知っている, わたしは盲人であったが今は見えるということ。

ἐν οἶδα ὅτι τυφλὸς ὦν ἄρτι βλέπω·

二つの「知ること」の対抗的登場。新たな次元での WII。WII'の萌芽としての WI に近い直接経験。

周りの民衆, 権威者, むき出しの強権者が「なぜだ πῶς」と問うが, この驚嘆, 慶び, 祝福, 中立的調査, 査問, 理解努力の放棄, 律法侵犯の態様確定という様々な位相の言語行為が産婆役となって, 上の直接経験が WII'として成長していく。物語はその次第を精密に語りあかしている。「なぜだ πῶς」記述は5回の発展的系列をなしているが, ここにはその一覧のみを掲げておく

A しるし αα	V 1-12	PW ₁ +「開く ἀνοίγω」のアオリスト形 (受動)・隣人	V10
B 盲人の査問 I	V13-17	PW ₂ +「見えるようになる ἀναβλέπω」のアオリスト形・ファリサイ派	V15(V16)
C 両親の査問	V18-23	PW ₃ ・PW ₄ +(ともに)「見える βλέπω」の現在形・ユダヤ人と両親	V19,21
B' 盲人の査問 II	V24-34	PW ₅ +「開く ἀνοίγω」のアオリスト形 (能動)・ユダヤ人	V26

A'しるし ββ/裁き V35-41

[注：PW_x+<πῶς と結合された動詞>とその時制・発話主体（提示者は全て著者）]

BB. イエスの業の中に、「神から」を感知すること

第二査問の被告側最終弁論結論部

^{9:30}彼は答えて言った。「[一方で]あなたがたは知らない、あの方がどこから（の存在）であるかを、そして[他方で]、あの方は開けてくださった、わたしの目を。これは実に不思議です。

[A：前提となる神についての知]^{9:31}わたしたちは知っています、神は罪人の言うことはお聞きにならないが、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになることを。

[B：出来している眼前の事実]^{9:32}盲人で生まれた者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。

[C：結論。AとBとの結合]^{9:33}あの方が神から（の存在）でなかったなら、[この類の]何もおできにならなかったはずです。」

^{9:34}彼らは答えて言った、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えるのか」と、そして彼を外に追い出した。

CC. 伸保者・人の子の臨在、その方との合一

^{9:35}お聞きになった、イエスは、彼らが追い出したことを、彼を外に。

そして彼をみつけたとき言われた、

「あなたは信じるか、人の子を。」

^{9:36}答えた、彼は、そして言った。

「それでどんな人ですか、主よ、

わたしが信じるために、その方を。」

^{9:37}言われた、彼にイエスは。

「あなたはもう見てしまった、その人を、

そのうえ、あなたと話している者、まさにこの者が現在する。」

^{9:38}彼は言った、「信じます、主よ、」、そして彼に平伏した。

^{9:39}言われた、イエスは。

「裁くためわたしはこの世に来た。

見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになるために。」

9.35 Ἦκουσεν Ἰησοῦς ὅτι ἐξέβαλον αὐτὸν ἐξω

καὶ ἐύρων αὐτὸν εἶπεν,

Σὺ πιστεύεις εἰς τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου;

9.36 ἀπεκρίθη ἐκεῖνος καὶ εἶπεν,

Καὶ τίς ἐστίν, κύριε,

ἵνα πιστεύσω εἰς αὐτόν;

9.37 εἶπεν αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς,

Καὶ ἑώρακας αὐτόν

καὶ ὁ λαλῶν μετὰ σοῦ ἐκεῖνός ἐστιν.

9.38 ὁ δὲ ἔφη, Πιστεύω, κύριε· καὶ προσεκύνησεν αὐτῷ.

9.39 καὶ εἶπεν ὁ Ἰησοῦς,

Εἰς κρίμα ἐγὼ εἰς τὸν κόσμον τοῦτον ἦλθον,

ἵνα οἱ μὴ βλέποντες βλέπωσιν καὶ οἱ βλέποντες τυφλοὶ γένωνται.

10章「C：光と闇」での光の啓示は二つの方式でなされている。〈アナログア〉の方式V22-30と〈相互内在〉の方式V31-39がこれである。後者は先在のイエス、派遣された者キリスト論を一方の契機として含み、全体として奥義の性格を持つ。他方前者は9章の癒やされた人の信仰の全過程を反省的に捉え返したものとみなされうるのである。その過程は「シロアムの池に行って洗いなさい」とのイエスの言葉への従順、'Εγὼ εἰμιの発語、「あの方は預言者です」の告白、第二査問での弁論、'Ο λαλῶν μετὰ σοῦを「顔と顔を合わせて」礼拝することに分節しう。この過程を捉え返せば次のようになろう。

彼の信仰は「行って洗いなさい」のイエスの言葉をうけてこれにそのまま従った時から芽生え始めた。彼は光を賜物として恵与された。そしてこの賜物はイエスの祈りと行動における神との一致が地上に下り現実の形となったものであることを彼は知った。それだけでなく彼は、イエスその人から'Ο λαλῶν μετὰ σοῦの近みにおいて、人の子を「君はもう見てしまっている」と言われた瞬間、自分は今神とイエスのあの一体性へと引き上げられているのだということ、こうしてもう永遠の生命が与えられているのだということ、このことに気付かされたのである。

〈アナログア〉による啓示方式はこの経験の本質をわかりやすく解き明かしている。

A : 10:27 わたしの羊はわたしの声を聞く。

わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

B : 10:28 わたしは与える、彼らに永遠の命を。

彼らは永遠に滅びない。

だれも奪うことはできない、彼らをわたしの手から。

B' : 10:29 わたしの父がわたしに与えられたもの、

それはすべてのものより偉大である、

だれも奪うことはできない、父の手から。

C : 10:30 わたしと父とは一つである。」

ここには典型的な〈A→B・B→C〉という「四歩で三段進むトリアーテ」の形式が記述されていて、この形式に乗って、〈子と弟子たちの一致→子と父の同型の働き→子と父との一致〉という（信仰の勢位上昇の）内実が示されている。ここでの一致のあり方は、手に取るように明らかに、子の弟子たちに対するは父の子に対するに等しいという〈アナロギア〉に他ならない。このことの内容をいま一步踏み込んで読みとってみよう。

A : 「声を聞く」とは存在次元での共振・共鳴、存在の同型性の現出であった。

それは「知ること」の次元での相互性にも昇華する。

B : 「永遠の命」を〈与える〉とは、受領者が授与者の〈手に帰する〉ことである。

B' : Bで子に信ずる者たちが（可能的にでなく現実的に）子の〈手に帰した〉。それは即ち、幾久しい前から父が子に（可能的に）〈与えられていた〉ことが現実態となったのである。受領者である子は、そしてむしろ強調されるべきこととして、子の〈手に帰している〉人々は、授与者である父の〈手に帰した〉。そして父の〈手に帰した〉人々は、「すべてのものよりも偉大である、だれも父の手から奪うことはできない」と明確に語られているのである！（アウグスチヌスの理解を学ぶが、われわれはこのように読む。参照、加藤常昭『ヨハネ2』492f:473f）

C : 子と父の一体の〈再〉実現とは、招き入れるためにいわば宴を中断して子が出かけられ、父からの声をもって子が命と引換に呼び集められた、この世的には汚れて卑しく貧しい人間たちを中にして、父と子の愛の共食がいよいよ〈再〉開されるということである。「下からのアナロギア」は認識の道としてのみ「下から上へ」というのではない。見られるように、人間の共同体が〈神から〉の存在へと現実態として転倒されるということ、人間共同体がその存在において「下から上へ」と、高められるということである⁴。

5-10章の長大物語の一貫したモチーフである「父と子の一致」は5章で「父と子の相等」という最初の直接性（=家郷）として提示され、これに、イエスが「子は父の影」として自らの言葉で相違性という否定性を刻み込まれたとき物語は始まったのであった。そのときから子は「天での一致をしりえにして」未来終末論的此岸に降下され、信ずる側の認識の道も「上からのアナロギア」を開始した。物語は6-7-8章の過程でイエス降下の道から上昇の道に転じ、10章では「父と子の一致」は「父と子の一体」として直接性（=家郷）を回復し、未来終末論は現在終末論に転倒され、信ずる側も「下からのアナロギア」を辿り終えた。しかしこの「下からのアナロギ

ア」の道は「人間たちの共同体」が全体として父と子の愛の一致のうちへと引き上げられる道だったのであり、「父と子の〈再〉一致」とは、人間の共同体の子に対するは子の父に対するに等しいというアナロギアにおける、人間共同体の父子関係(それまではこの関係は「孤独だった」)の内への現実的な獲得であり、このことこそが現在終末論の内容である。

1] はじめにイエスの言葉を聞くということがあり、2] この言葉と奇跡の賜物が神からであることを知り、3] イエスは人の子に他ならないことが示された、あの癒やされた人の信仰の勢位上昇のこの過程、これを捉え返して解き明かしたものが10章の〈アナロギア〉の方式である。

しかしこの方式にはどうしても乗り越えきれない欠陥がある。この方式においては子と父とが「一つである」ことは究極のところ、事態の外部から〈アナロギア的に推論〉する以外にないのである。事態の内部に立ちこの内部から「一つであること」を明らかにするには〈相互内在〉の方式が不可欠なのである。

このように見てくるとヨハネ「福音書」のプロローグの新しい読み方がここに与えられているのは確実であると思われる。

¹¹初めに言があった。言は神と共にあった。言(の本質)は神であった。

¹²この言は、初めに神と共にあった。

1.1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1.2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

V1の「初めに」をV2の「初めに」と同義と理解すればここには父・子・聖霊の「先在」が語られていることになり、これが従来の読み方である。この方法は二節全体を一つのものとして、いわば〈相互内在〉の方式の光の下に読むものである。ただV2に見られる反復(のようなもの)の説明が困難であり、それを解消する方策としてヨハネ愛用の οὗτος に着目し、この節が二次的であると言われたりする(今度は、この付加の意図の説明が困難となる)。難点はあるがこの読み方は確立されている。

他方V1の「初めに」は「信仰者にとって先なるもの」を、V2の「初めに」は「事柄において先なるもの」を指示すると解してみよう。そうすればV1は〈アナロギア〉の方式による啓示を、V2はこの方式の欠陥を補全するものとして〈相互内在〉の方式による啓示を、それぞれ語るものと考えられる——信仰の勢位上昇の過程を要約した上記下線部とV1の三段階は対応。

この二つの読み方のどちらか一方でなく両方が二重に、むしろ読み方の〈相互内在〉として両者の回転の相において、採用されるべきであろう。〈アナロギア〉、〈相互内在〉の二つの方式での啓示ということの射程を瞥見したところで、もう一度、癒やされた人の認識論にもどっておきたい(新しい読みで、V1は「外的反省」、V2は「内的反省」)。

以上の若干の考察と8章末尾における「絶望の段落」でわれわれが得た認識⁵に踏まえ、癒やされた人の認識の出発点と彼の最終弁論結論部とを比べてみて、われわれは彼の認識論をあるタイプの現象論的・反省論的認識と性格づけることができると思う。出来し現象した業に直面しこれを上なる根拠へと反省しつつ〈自分の目に正しい確信〉の崩壊を経験し、その崩壊の淵から自らの根が〈上からの生命〉に張っていき、こうして根底から転倒させられる過程を辿る認識、これである。

〈下から〉「業」を信じる道の上で、自らが蒙った「業」は〈上からである〉と気付くのと、「イエスが誰か」の言葉（パラクレートの声）が〈上から〉彼に聞こえてくるのが同時である、そういうことをこの人は経験したのであろう。

第2章 良い羊飼いは羊のために命を捨てる

第1節

10章の前半部、たとえとその解釈ならびに実現した言語行為の叙述箇所へと、考察の焦点を戻そう。V18でイエスの「たとえ解釈」が終わってV19から地の文が続くが、このV18とV19の間に重大な切れ目が入っている。この切れ目とその前後の広がりにもたらしているインパクトは非常に大きいものがある。ここでその全貌を解明することは到底出来ない。ただ、この切れ目によってV18以前が回顧の対象としてとりまとめられたという点に注目し、その観点から考察をすすめる。

V19以降を読み進む読者は不可避免的に、自らの読解の過去を振り返る視点を基点としたパースペクティブで、下から上へとテキストの各行の重なりを——豎琴の奏者が手前から向こうへと弦の列を透かし見るようにして——眺め返すことになる、ということに注目しよう（まさに同様のことをわれわれは小論『エイドー』で経験した202ff.。あの場面では読者は11,33の位置に立ち、そこから上方を何度も振り返ったのである）。V19に上を向いて立っている読者の耳横で、地の文は、「ユダヤ人」たちの悪霊憑き言辞による罵倒を柱にした発話内行為を紹介している——われわれの考察は今後しばらく、テキスト上のこの位置に立って、ここから上方の各行を眺めながら進めていくことになる。

「ユダヤ人」側の上の発話内行為の基盤をなす中心的なフレームは四項定式を備えていて、その焦点は第二項（＝イエスの言葉は〈神から〉であること）と第三項（＝イエスはこのことを自らの死を覚悟して公然と語られた）との緊迫した関係にあった⁶。ここでの第三回目の悪霊憑き言辞では、この中心的定式の第二項と第三項とは一つのもので結合されたのである。つまり死を覚悟して〈神から〉の言葉を語り出すという次元から、自らの命を自ら捨てるという行為によって〈神から〉の働きを白日の下に実現し知らせるといふ次元へと転換されたのである。父と子の愛の一致におけるこの緊密な行動の宣言によって、「ユダヤ人」たちをして悪霊憑き発言に向かわせる条件はいよいよ緊迫したものとして形成されたといふべきである。彼らの隠された殺害意志を煽るようにして語られた、われわれの立つ位置V19直前のイエスの言

葉をもう一度聞き直してみよう。

10:17 こういう訳で父はわたしを愛してくださる

その訳とは、わたしが命を捨てること、そしてそれは再び受けるためにであること、これである。

10:18 だれもわたしから命を奪い取るのではない、わたしは自分でそれを捨てる。

わたしは命を捨てる力を持ち、それを再び受ける力を持つ。

これは、わたしが父から受けた掟である。」

10.17 διὰ τοῦτό με ὁ πατήρ ἀγαπᾷ

ὅτι ἐγὼ τίθημι τὴν ψυχὴν μου, ἵνα πάλιν λάβω αὐτήν.

10.18 οὐδεὶς αἶρει αὐτήν ἀπ' ἐμοῦ, ἀλλ' ἐγὼ τίθημι αὐτήν ἀπ' ἐμαντοῦ.

ἐξουσίαν ἔχω θεῖναι αὐτήν, καὶ ἐξουσίαν ἔχω πάλιν λαβεῖν αὐτήν.

ταύτην τὴν ἐντολὴν ἔλαβον παρὰ τοῦ πατρός μου.

一番目の外枠、第1行、第5行は両者とも父の意志であり、われわれはこれを最も高い位置から記述しておいた。父の意志のこの枠組みの完璧な内部に、イエスの生死の行動はあるということである。二番目の枠の第2行、第4行は中位の高さから記述してあるが、父の意志を受けそれを自らの自由において実行する全権を子が受け取っていて、子によるその完遂がまた父の悦ばれるところであるというのである。この神との親密さの公言は「ユダヤ人」の憎悪の炎を燃え立たせるに十分であろう。最下段に記してある中央行の機能は、この二重の権威づけを背景に地上のイエスが人々に向かって発せられる「裸の」発話内行為（「君を救うためにわたしは命を捨てる」という行動を遂行しつつあることの宣言）そのものである。権威づけなしの「裸の」発言がどれほどみすばらしいかは、聞かれる通りである。「ユダヤ人」から歯をむき目をむき軽蔑・嘲笑のつぶてを受けることは必定である。逆にこの言葉が二重の枠の中に入ったときの力強さは驚嘆すべきものがある。

さてわれわれの記述様式において第2, 3, 4行に連続してイエスの「命を捨てる」の言明は語られていた。ここから Nesle27版でほぼ4行を開けた上方に

V15b わたしは羊のために命を捨てる。τὴν ψυχὴν μου τίθημι ὑπὲρ τῶν προβάτων.

またそこからほぼ7行を開けた上方に

V11b 良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς τὴν ψυχὴν αὐτοῦ τίθησιν ὑπὲρ τῶν προβάτων.

と語られていた。

目を閉じて、向こうからの声を心の内に反芻してみよう。

初めに遠くでイエスの声が出たのである、「わたしは羊のために命を捨てる」。

それからしばらくしていまだ少し近くから [7行分!], またイエスの声が出た、「羊のために命を捨てる」。

それからなお少し間をおいた後、ずいぶん近くに来られた [4行分!] イエスは、言葉を繰り返されながら眼前にまで歩み寄られているのである。「捨てる／受ける」、「奪われるのでない／自分から捨てる」、「捨てる／受ける」

ところでイエスは「公然と」エルサレムへ上られた後、その言葉が「ユダヤ人」たちを痛撃するが故に何度も手を掛け殺されそうになったが、その時がまだ来ていなかったため、その都度災難を免れておられたのだった(7, 30. 32. 44: 8, 20. 59)。V11bの後にまたV15bというふうに、同じ「命を捨てる」という言葉の反復を聞くとき読者はこのことを思い出してしまうだろう。V11b(命を奪われかねない事態にイエスは直面された、しかし未だその時に至っていないので緊張状況は緩み)、それからしばらくして [7行分!], V15b(またイエスの生命の危機を前に緊張と弛緩があり)、それから程なく [4行分!], イエスの「命を捨てる／受ける」の言葉が連打されていく——象徴次元でイエスは、V17-18の箇所で殺されたのである。

第2節

地上のイエスの時とヨハネ共同体の時との物語時間の二重化のもと、後者への移行ということがV19以後に生じているが、その手続きはこのように慎重に積み重ねられているのである。V19に立って悪霊憑き言辞を耳にした瞬間から、読者の耳底に開始した(テキストを上方へ向かっての)イエスの言葉の想起は、イエスの死という〈ヨルダン川渡河〉以前を回想するものである。イエスの声は鳴り響いたのである。しかしその声は音の必然として消え去った。消え去ったからこそそれは音だったのである。

テキストを上方へ向かって再読する作業は、亡くなられた方の生前の言葉を反芻する行為である(われわれは「この反芻を促されるのはどなたであるか」と、問わされてもいる)。

10:10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。

わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

10:11 わたしは良い羊飼いである Ἐγὼ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς.

良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς τὴν ψυχὴν αὐτοῦ τίθησιν ὑπὲρ τῶν προβάτων.

0:12 羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、

狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。

..狼は羊を奪い、また追い散らす..

10:13 彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。

10:14 わたしは良い羊飼いである Ἐγὼ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς,

そしてわたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。

καὶ γινώσκω τὰ ἐμὰ καὶ γινώσκουσί με τὰ ἐμὰ,

10:15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。

わたしは羊のために命を捨てる。

亡くなられた方の回想は、ここでは（イエス運動のある段階以降に生じた）復活信仰の定式ともいべき形式の下になされている。その方がどのようにして地上に來臨され、地上で何をなされ、どのようにして地上を離れられたか、これを出来るだけ簡潔、鮮明、強力に印象深く提示するという形式で。

先ず前半、降下局面。上下の下線部（地上の者たちの苦難）に注目されたい。これがこの範囲の外枠をなしている。「わたしが来た」という出来事、この方の到来の核で燃え輝く愛が、暗い外枠を背景に profile されている。上掲 V10b-11を回想しつつ読者は想うであろう——この方はその命をお与えになったほどに、ご自分の羊を愛されたのだと（Vgl. 3,16a, なお Nestle 27版は10,18 *ἀγαπώ* は現在形を採用しているが、われわれは不定過去形を採る読みに従いたい思いがある）。この方の過去を振り返ることとテキストの前方を振り返ることが重なり合うことによって読者は一層強烈に自らの記憶の底へと降り下って行くはずである。その底で読者は、この方の地上での死はこのわたしの「ため *ὑπέρ*」であったことを骨身に徹して知らしめられるであろう。

次に後半、上昇局面。ここの「知ること」はたんなる觀念次元での営為ではあり得ない。子の羊に対するは父の子に対するに等しいとされた「知ることのアナログア」は、互いに同調共鳴し合う存在次元の同型性を示すものである。そうであるなら、後半の上昇の道でこの方がなされる牧人としての業は、父と子の存在の同型性（この位相は最も高い位置に記述してある）のうちへと彼の羊の存在を親和させ引き上げるものであることが示されているのである。

こうしてみると、同じ「良い羊飼い」という言葉が降下場面 V11と上昇場面 V14とで使用されてはいても、そこに含意された内実とは全く異なるものであることが明らかになる。

前者では、羊飼いか雇い人かという関連の中で「良い羊飼い」が語られている。だからここで「良い」とは羊飼いの理想型、羊飼いの極致を意味していて、いわば英雄的な自己犠牲が語られていよう（これがいわゆる「雇い人根性」と対比されているのである）。こうしてここでは「良い羊飼い」が語られているのであり、その良さは人間的地上的である。他方後者では、父が子に関わられるように子が羊に振る舞われることが即ち「良い」の意味である。この「良さ」は詩編23の如きものであり地上の羊飼いをむしろそのたとえとしていて天神的である。こうしてここでは「良い羊飼い」が語られているのである。（アウグスチヌスの語り口を借りれば、〈良い〉の意味は、前者は人間によって *secundum hominem*、後者は神によって *secundum Deum* である）。これに関連して、降下場面での「羊のために命を捨てる」ということは〈命の放棄〉が中心的意義だが、上昇場面でのそれは〈命の賜物〉である。ここでもまた、ヨハネの鏡に同一の術語が併置されているとき、その像の内実が完全に転換されていることが示されているのである。

なお羊に関わるのに、自分の命を捨てるほどに羊を愛される方と、自分の命を得るためにのみ羊に関わり自分への愛をのみ貫こうとする者の対比、羊飼いと雇い人との対比の背景にエゼキエル34の「自分自身を養う悪しき牧者」への言及を聞くべきであろう（アウグスチヌスはフィリピ2,21の「自分のことを追い求める」を聞き取っている）。

鳴ってやがて消える音、その音・響き・声において亡くなられた方を振り返るということ、このような10章の場面設定は、十字架のイエスの想起になんと意義深いことであろうか。紛うかたなく確実に消えたから、だから今明瞭に聞こえる、留まる音。

第3節

10:7言われた、そこでまたイエスは Εἶπεν οὖν πάλιν ὁ Ἰησοῦς,。

「はっきり言っておく'Αμην ἀμην λέγω ὑμῖν ὅτι。

わたしが羊を招き入れる門である ἐγὼ εἰμι ἡ θύρα τῶν προβάτων。

10:8わたしより前に来た者は皆 πάντες ὅσοι ἦλθον [πρὸ ἐμοῦ],

盗人であり、強盗である κλέπται εἰσὶν καὶ λησται。

しかし、聞かなかった、彼らに、羊は。

ἀλλ' οὐκ ἤκουσαν αὐτῶν τὰ πρόβατα。

10:9わたしは門である 10.9 ἐγὼ εἰμι ἡ θύρα*。

わたしを通過してもし誰かが入るならその者は δι' ἐμοῦ ἐὰν τις εἰσέλθῃ

救われるだろう] σωθήσεται。

出入りして καὶ εἰσελεύσεται καὶ ἐξελεύσεται

牧草を[見つけるだろう] καὶ νομὴν εἰρήσει。

10:10盗人は来はしない ὁ κλέπτης οὐκ ἔρχεται,

盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりする[ためでないならば]。

εἰ μὴ ἔγωγ κλέψῃ καὶ θύσῃ καὶ ἀπολέσῃ*。

わたしは来た ἐγὼ ἦλθον,

羊が命を持つ、しかも豊かに持つ[ため]である。

ἔγωγ ζωὴν ἔχωσιν καὶ περισσὸν ἔχωσιν。

10:11わたしは良い羊飼いである 10.11 Ἐγὼ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλός。

良い羊飼いは ὁ ποιμὴν ὁ καλός

自分の命を捨てる τὴν ψυχὴν αὐτοῦ τίθησιν。

羊の[ために] ἵπέρ] τῶν προβάτων*。

「羊の囲いのたとえ」部と、9章冒頭の「しるし物語」部とは三位一体論を背景にして語られているという点でもまた、両者は鮮明に平行している。この「たとえ」部では、「門」、「羊飼

い、「門番」については、寓喩としてそれぞれ「父」、「子」、「聖霊」と理解する以外にない。この箇所では「父」が「門」であるとは、父なる神の先行する選びとそれを遂行するために子を「門」を通して「地上へと」派遣されたことに注目して、この父の働きの動詞概念を物体化して表現しているのである(バシレイアについてよく言われるように)、とわれわれは解する。神のこの選びの御心を体して、選ばれた者たちを導く全権を与えられた方のみが、「門から入る」のである。ここでは「門」と「羊飼い」とのその權威における区別は決定的である。

しかし上掲「たとえ解釈」部の冒頭では、「門」と「羊飼い」のそれぞれの意味も相互の関係も、「たとえ」部のそれとは全く異なる。すでに前節でも、ヨハネが同じ表現を重ねて語るとき、そこでは含意された内容の重大な転換が行われているのだということを、「良い羊飼い」、「命を捨てる」という重要術語においてわれわれは確認したところである。

ここで上掲引用部に注目されたい。テキストの内容を明確化させるために、語られる項目に即して各行の始まりを高・中・低と分けてみると、Ἐγὼ εἶμι, ἐγὼ ἦλθον 発言は中央に、過去と地上項は低く、未来と天上項は高く集約できる。このようにテキストの記述箇所を少し工夫するだけで、実はここで次のことが語られているのだということが鮮明に立ち現れてくる⁸。Ἐγὼ εἶμι, ἐγὼ ἦλθον 発言は力を持って垂直に降下した、時を替える神の言語行為として、過去と未来を明確に区分しているのだということ、これである(それはたんに時間的区分に留まっているものではなく、やがてアイオーンの区分であることが後半で浮かび上がっている)。Ἐγὼ εἶμι, ἐγὼ ἦλθον 発言を切っ先にして現在直下に終末が湧出しつつあるということ。

「たとえ解釈」部のこのような、暴力的現在による過去と未来の激烈な転轍と、「たとえ」部の危機的背景に緊張を張り渡して止住する現在性、この両者の対比は劇的ですからある。静から動へと鮮やかに転換されたセッティングを背景に「わたしが羊の門である」と、いまやはじめて「門」は属格付きで語り出されたのである。新しく地上時間が流れ始めたなかでのこの属格使用は、「門」に物体化された動詞概念の他動詞性が顕在化したことと表現であるとわれわれは解するのである。「門」である「わたしよりも前に来た ἦλθον 者」が語られ得るためには、ここでの「門」とは、「来た」ἦλθον V10といわれうる時間的で[も]ある動作主体のことでなければならぬ。「選ぶ」という、絶対的主体者である父の行為を、「わたしが地上で代行し執行するのである」とイエスは宣言され、「わたしが羊を招き入れる門である」と、自らの為されつつある行為の意味を語り明かされているのである(第二位格の神が可能的に内包される三一性、その父の契機)。

V9の「門」は、読者に、「これは羊の囲いの門ではないではないか」と思わせるに十分なものをもっている。後者を「通って διὰ」入るのは、羊飼いである人の子・イエスであるが、前者「わたしを「通って διὰ」入るのはイエスに信じる者たちである。この διὰ の違いは明らかであろう。後者は神の選びと子の派遣、前者は子の語りかけ(声掛け)と信ずる者たちの召し。このようにみれば、V7の「門」も、すでに羊の囲いの門という表現で含意されていたものを継承しつつ(選びの代行)、新しい意味(召して導き出す)を得つつあったのである。

上記引用部の最後の三行は、この「門の働き」の神髄、自分の命を地上へ（テキストの低い位置へ）と放擲し、その軌跡を逆に辿るよう^{10:1}にして、召された者を地上から上へ（テキストの高い位置へ）と引き上げる（上掲テキストをぜひ参照されたい）、その結節点としての「門の働き」をなす「良い羊飼い」を表している。この語りの行為は、依り頼む者を自分の命と引替に召して導き出す十字架性、愛の一致における父と子の約束、を実現する発話内行為である。イエスにおいて、「門の働き」と「良い羊飼いの働き」とはく越え行かせる、cross over させる）十字架として、全く同一のことなのである。

このように見てくると、5-10章のわれわれの物語は、イエスの降下・上昇、読者「にとつての」「上からのアナログア・下からのアナログア」という物語過程が打ち上げられるイメージ的な基盤として、ヤコブの叫び「そうだ、ここは天の門だ」Gen28,17のうえにイエスの十字架を重ねて（悲しくも慶ばしい、不思議な雰囲気の中に）思惟するよう、読者の想像力を誘発しているように思えてならない。つまり「たとえ」部の（羊飼いが）「門を通過して入る」とは、（人の子・イエスが父から全権を与えられて）「天の門を通過して」地上の個々の（ユダヤ人、サマリア人などの）危機的様相を深める集団の内へ降下されることを、（イエスに信ずる者が）「わたしを通過して入る」とは、（人の子・イエスに召されて彼と共に）「天の門を通過して」父の国へと上昇することを、「出入りする」とは、人の子・イエスと共にこの「天の門を通過して」「昇り降りする」（1,51）ことを、という具合にである。そうすると小論の読者も、サマリア女物語の中のヤコブの井戸が全編に占める位置について、あるいはそのほかのことについて、思い当たられることがあるのではなかろうか。

第3章 羊の囲いのたとえ

以上の準備をもってわれわれはいよいよ「たとえ」の読解に入るが、実はわれわれはもはや語るべきことはほとんどない。テキスト引用に当たって引き続き右側に否定的な地上の現在、左側に希望の天的な終末の現在を集約することにする。

^{10:1}「はっきり言ておく。

入らない者、門を通過して

羊の囲いに、

そうではなく乗り越えて来る者、ほかの所から

その者は、盗人であり、強盗である。

^{10:2}しかし入る者、門を通過して、

彼が羊飼いである。

^{10:3}この者のために門番は開き、

そして 羊は 彼の声を 聞く。

そこで 自分の羊を 彼は呼ぶ、名によって

そして連れ出す, 彼らを。

10:4 自分の羊をすべて連れ出したとき,

彼らの前を彼は行く。

そこで羊は彼について行く,

知っているからである, その声。

10:5 ほかの者にはしかし,

決してついて行かず,

彼らから逃げ去る。

知らないからであるほかの者たちの声。」

10:6 イエスは, このたとえを彼らに話されたが,

彼らは分からなかった, 何であったか, 彼らに話されたことが。

10.1 Ἀμὴν ἀμὴν λέγω ὑμῖν,

ὁ μὴ εἰσερχόμενος διὰ τῆς θύρας

εἰς τὴν ἀνὴν τῶν προβάτων

ἀλλὰ ἀναβαίνων ἀλλαχόθεν

ἐκεῖνος κλέπτης ἐστὶν καὶ ληστής.

10.2 ὁ δὲ εἰσερχόμενος διὰ τῆς θύρας

ποιμὴν ἐστὶν τῶν προβάτων.

10.3 τούτῳ ὁ θυρωρὸς ἀνοίγει,

καὶ τὰ πρόβατα τῆς φωνῆς αὐτοῦ ἀκούει

καὶ τὰ ἴδια πρόβατα φωνεῖ κατ' ὄνομα

καὶ ἐξάγει αὐτά.

10.4 ὅταν τὰ ἴδια πάντα ἐκβάλῃ,

ἐμπροσθεν αὐτῶν πορεύεται,

καὶ τὰ πρόβατα αὐτῷ ἀκολουθεῖ,

ὅτι οἶδασιν τὴν φωνὴν αὐτοῦ.

10.5 ἀλλοτρίῳ δὲ

οὐ μὴ ἀκολουθήσουσιν,

ἀλλὰ φεύξονται ἀπ' αὐτοῦ,

ὅτι οὐκ οἶδασιν τῶν ἀλλοτρίων τὴν φωνὴν.

10.6 Ταύτην τὴν παροιμίαν εἶπεν αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς,

ἐκεῖνοι δὲ οὐκ ἔγνωσαν τίνα ἦν ἢ ἐλάλει αὐτοῖς.

まず、右側にある前後各四行の（下線を施した部分を含む）外枠に注目されたい。共同体は外部者による篡奪行為に曝されている。これを landmark にして「その内部に」、trajector として上から（テキスト上、左から）の声が下り、声を聞き取る者たちを集め、彼らを引き連れて上昇して行っているのである（引用部分を視覚的に跳め、つぎに目を閉じて、阿鼻叫喚の background の中を降り来たり昇り行く良き声の動きを聴覚的に後づけて、つまり scan して、この響き渡る声の中に全体像を想像して欲しい）。

ひとはここにどのような「声」を聞き取るだろうか。

それを妨げないため、われわれは沈黙する。

+

われわれの述べきたったこと、および本小論冒頭の「概要」を想起されれば幸いである。

ところでわれわれが繰り返し指摘しているごとく発話提示語 *λαλεῖν* が「音」を強調していることにヨハネは強い関心を寄せているが、彼は上記引用文末尾でこう語っている。「何であったか、彼らに話されたことが *τίνα ἦν ἃ ἐλάλει αὐτοῖς*」を、「彼らは」理解しなかったと。それは漠然と、イエスの「たとえ」の内容一般がわからなかった、という意味ではなく、「たとえ」を語られるイエスのこの声が、篡奪されつつバシレイアが到来していることを告げる「第一位格の神の声」⁹であることが聞こえなかったという意味である。それはもっと限定的に、イエスの言葉の中に立ち現れている、次のような親密な我・汝関係のうちの呼び声、

そして 羊は 彼の声を 聞く。

そこで 自分の羊を 彼は呼ぶ、名によって

この呼び声を「彼ら」が聞くことが出来なかったのだという意味である。上記 *ἐλάλει αὐτοῖς* の語法は、まさにこの我・汝の personlich な〈声が彼らに〉語りかけられているのに…ということを示しているように思われる。この語法に誘われてわれわれは、この「たとえ」の声の向こうに（ie テキスト上、「たとえ解釈」部の末尾に上の行を向いて立っているわれわれの前方9, 37に）こちらへ向いて立っておられる、この声の主体を意識する、

あなたと話している者、まさにこの者が現在する *ὁ λαλῶν μετὰ σοῦ ἐκεῖνός ἐστιν* 9,37

人の子・イエスの上昇されつつある場面でのこの最高の出会いは、この方の降下された場面での

わたしは在る、あなたに話している者だ *Ἐγώ εἰμι ὁ λαλῶν σοι* 4,26

という出会いに明確に対応している。〈あなたにララインする〉と語られるこの方の名は、「在りて在る」ではなく「君に語りつつ在る」である。われわれはヨハネ「福音書」における *λαλεῖν* の用法のこの最高形態を「臨在の *λαλεῖν*」と名付ける¹⁰。

われわれは V18と V19の間の切れ目に非常に深いものを予感し、この切れ目がテキスト前段に向かって回顧させているという一つの観点のみに依拠することにした。その視座からこの切

れ目に立ち続け、テキスト上方を上へ上へと見上げつつここまで分析を重ねてきて、「君に語りつつ在る」と言われる方の声を聞いている。V18とV19の切れ目を「御足の下」とする、出エジプト24,10-11の如き巨大な神にわれわれは出会っているのかも知れない。並木浩一氏の言葉を借りればそこでは次のような事態が進行していた

神は御自身を開示したが、沈黙を保ち、かつ何事も行われない。神は御自身を見られるままに示すのみであり、その間にイスラエルの指導者たちは食べて飲んだ。この行為は、神の視線のもとで兄弟盟約を確立する契約の食事にあずかることを意味している。このように非日常的なしかたで共同で神を見る行為は、人々が自己を神の民として創出する行為である。¹¹

語らず見られるままに見守られる神、そして神喪失の嵐の夜に泣き叫びつつ呼び求める声に応答して語りかけられる神(マグダラのマリア物語からのわれわれのパラクレートス理解)、二重の巨大な神の足もとでわれわれは想起の共食にあずかっているのであろうか。

「臨在の *λαλεῖν*」についてはその一側面を論ずるにしても、多くの準備を必要とする。われわれは拙論『諸起源』にて、その作業を開始する予定である。

第4章 神の言葉が語りかけられた人たち

第1節

前章でわれわれは、「羊の囲い」の比喩説話を語られるイエスの言葉のうえに、地上を歩むバシレイアが現出しているのであると述べた。その際、このバシレイアは篡奪行為に襲われ、あまつさえその頭の喪失の危機を前にしていることも示した。10章冒頭の「たとえ」とその「解釈」の語りを、終わりから先頭へと辿り終えたいま、小論の読者は下に掲げる詩編82をどのように読まれるだろうか。

詩編第82篇 (81) 関根正雄訳

われわれはこの詩を預言者の詞ととる関根氏の解釈に従う(2節:叱責の詞, 3-4節:警告の詞, 5-7節:威嚇の詞と分節され, 2-7節全体がヤハウエの言とみることとなる)。同氏は「八節は一節にあい応ずるこの詩のわくをなす。ここで詩人自身が初めて決定的に発言するとわれわれは解する。神々という中間存在に支配されるこの世界と人間の現状に堪えられずに詩人はヤハウエ御自身が直接諸国民を支配し、地上を審いて下さるようにと叫んでいる。このような直接の神の顕現をイスラエルはシナイで知り、預言者たちを通じて知った…このようなイスラエル人の切なる願い求めに応じて神は最後に御子を遣わし、真の審きが何であ

1 アサフの歌。

ヤハウエは神の集いのうちに立たれ、
神々の真中で審きを行われる。

2 「いつまで君たちは不法な審きを行い、

悪人どもにひいきするのか。セラ

3 虐げられた者や孤児のために審き、

貧しい者や乏しい者を義とせよ。

4 虐げられた者や貧者を救い、

悪人どもの手から解きはなて。

5 彼らは知らず、悟らず、

暗きうちをさ迷う。

り、真の救いが何であるかを人類に示し給うた」
(323)と記されている。

地上での神々の極限的な横暴と天におけるヤハウェによる神々の裁きの開始というこのテーマを、エゼキエル34章と結び合わせてみるならば、これが、現在終末論としてのバシレイアの危機的出現という、ヨハネ「福音書」の「羊の囲いのたとえ」およびこのたとえ「解釈部」の叙述のひとつの背景であるとみるのも理のあることと了解していただけと考える。

地のすべての柱はゆれ動く。

6 わたしは言った、君たちこそ神々で、
みな至高き者の子らなのだ、と。

7 ところが君たちも人のように死に、
君侯たちと同じように没落するだろう。」

8 ヤハウェよ、立ち上がって

地を審いて下さい。

あなたこそすべての国民を支配し給うべき
です。

ところで、ヨハネが時に行うように(そして認知言語学もまた行うように)6-7節の外枠を完全に消去してその中だけを(つまり6-7節を最大スコープとして)読みつけてみて欲しい。後述するごとくヨハネはここに第一位格の神の我・汝関係における親密な呼びかけと、呼びかけられた人々の悲痛な死(ヨルダン川渡河前のモーセの死!)を読み込んだものと思われる。これは人の子・イエスの受難の後に続く、イエス運動を担う諸個人の迫害・殉教そのものである。この人たちはイエスの故に命を(奪われたのではなく)自ら捨てた人々である。

10:18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。10.18 οὐδεὶς αἴρει αὐτὴν ἀπ' ἐμοῦ

わたしは自分でそれを捨てる。

10:28わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、

だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。οὐχ ἀρπάσει τις αὐτὰ ἐκ τῆς χειρὸς μου.

10:29わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、

だれも父の手から奪うことはできない。οὐδεὶς δύναται ἀρπάξαι ἐκ τῆς χειρὸς τοῦ πατρὸς.¹²

このように見る限り、詩のこの部分はわれわれが10,19に立って「たとえ解釈部」を仰ぎ見たとき耳にした、「自分で命を捨てる」の打ち続くリフレインを想起させるものである。ヨハネは詩の6-7節に、イエスに信じるが故に死を迎えた人々への、レクイエムを聞いているのである。

本小論の読者もまた詩人にならって8節の位置に立ち、そこから上の行を望み見ながら再三再四この詩を読み直し(その際6-7節の「君たち」を篡奪の犠牲者として読み込み)、小論前章にてわれわれがヨハネ10,19の位置からその上の行を同じく望み見ながら、自分たちのために死なれた方を想起していたことを思い出されるなら、二つの文書の共振に驚かれることであろう。上掲詩編82最初の2行は、われわれのたとえにおいては、まさに篡奪の嵐の直中のバシレイアそのものであろう。

ヨハネがヨハ10,35.38cにそれぞれ詩82,6.5aを引用したとき、「たとえ」の上に篡奪の直中のバシレイアを示現させているテキストと、神々の絶望的な専横からの救出を呼び求める詩とが激烈に感応しあったのである。

上のようなイメージの喚起には関根氏の上記の記述は非常に刺激的なものであった。ここで

6節は「神々に対するヤハウエの大きな皮肉」(322)であり、5節は「神の言を悟らない」、暗黒の生物的生をさすものであること (ebenda) を確認しておこう。ところで、ヨハ 10,35は詩82,6の「神々」に関連し「神の言葉が語りかけた人々」について語っているが、その語りかけは詩の実体に即するなら叱責・警告・威嚇という性格のものであり、きわめて否定的な語りかけでしかないことも確認しておかなければならない。

しかしヨハネは、「神々」に対する否定的態度を捨象した上で、この詩を積極的に自らの語りのイメージ上の基盤とした。われわれはヨハネのこの「平衡感覚を突然失ったかのような読解の狭隘さ」のなかに、精密な考量のもとで設計する卓越したレトリカーの計算を、ではなく計算を忘れさせるほどのテキストの激情的な必然ともいべきものを、感じるのである。

第2節

イエスの「たとえ」と「たとえ解釈」は、イエスその人とイエスに信ずる人たちの死の暗い影を詩編82に投げかけた。その暗がりを背景にしてイエスと「ユダヤ人」たちとの対立の10章での絶頂を読むことにしよう。ここに詩編82が引用されているが、それは片言隻語ではなく詩人の嘆きそのものを、死んだ人々へのレクイエムへと取り込んだのである。

A : 10:31 また石を取り上げた、ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして。

B : 10:32 すると、イエスは答えられた。

「多くの善い業を、わたしはあなたたちに示した、父からのを。

その中のどの業のために、わたしをあなたたちは石で打ち殺そうとするのか。」

C : 10:33 ユダヤ人たちは答えた。

「善い業の故に、石打ちで殺すのではない、そうではなく神冒瀆の故に、である。

つまりあなたは、人間でありながら、自分を神としているからだ。」

D : 10:34 そこで、イエスは答えられた。

「書かれているではないか、あなたたちの律法に、

『わたしは言った、あなたたちは神々である』と。

0:35 あの人たちのことを彼は言ったのである、『神々』と。

その人たちに向けて神の言葉が語りかけられたところの。

そして、廃れることはありえない、聖書 書かれたもの が。

C' : 10:36 それなら、父が聖別して世に遣わされた者について

君たちは言えるのか、『おまえは神を冒瀆している』と。

わたしが言ったことを捉えて、『わたしは神の子である』と。

B' 10:37 もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。

10:38 しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。

そうすれば、あなたたちは知るに至り、また知り続けるであろう

わたしの内に父がおられ、わたしが父の内にいることを。」

A' : 10:39そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

A : 10.31 Ἐβάστασαν πάλιν λίθους οἱ Ἰουδαῖοι ἵνα λιθάσωσιν αὐτόν.

B : 10.32 ἀπεκρίθη αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς,

Πολλὰ ἔργα καλὰ ἔδειξα ὑμῖν ἐκ τοῦ πατρός·

διὰ ποῖον αὐτῶν ἔργον ἐμὲ λιθάσετε ;

C : 10.33 ἀπεκρίθησαν αὐτῷ οἱ Ἰουδαῖοι,

Περὶ καλοῦ ἔργου οὐ λιθάσομέν σε ἀλλὰ περὶ βλασφημίας,

καὶ ὅτι σὺ ἄνθρωπος ὢν ποιεῖς σεαυτὸν θεόν.

D : 10.34 ἀπεκρίθη αὐτοῖς [ὁ] Ἰησοῦς,

Οὐκ ἔστιν γεγραμμένου ἐν τῷ νόμῳ νομῶ ὑμῶν

ὅτι Ἐγὼ εἶπα, Θεοὶ ἐστε ;

10.35 εἰ ἐκείνους εἶπεν θεοὺς

πρὸς οὓς ὁ λόγος τοῦ θεοῦ ἐγένετο,

καὶ οὐ δύναται λυθῆναι ἡ γραφή,

C' : 10.36 ὃν ὁ πατὴρ ἡγίασεν καὶ ἀπέστειλεν εἰς τὸν κόσμον

ὑμεῖς λέγετε ὅτι Βλασφημεῖς,

ὅτι εἶπον, Υἱὸς τοῦ θεοῦ εἰμι ;

B' 10:37 10.37 εἰ οὐ ποιῶ τὰ ἔργα τοῦ πατρός μου, μὴ πιστεύετε μοι·

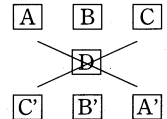
10.38 εἰ δὲ ποιῶ, κὰν ἐμοὶ μὴ πιστεύητε, τοῖς ἔργοις πιστεύετε,

ἵνα γνῶτε καὶ γινώσκητε

ὅτι ἐν ἐμοὶ ὁ πατὴρ κἀγὼ ἐν τῷ πατρὶ.

A' : 10.39 Ἐξήτουν [οὖν] αὐτὸν πάλιν πιάσαι, καὶ ἐξῆλθεν ἐκ τῆς χειρὸς αὐτῶν.

非常に鮮明な交錯配列が書き込まれている。これはわれわれが7項の配列において繰り返し目撃したように、右図の如き十字架交錯配列であり、交錯部で「神々」と言われた人々の死が象徴されているのである。



AとA'は命を狙う迫害の手にイエスその人が曝されていることを示している、これが状況の全体枠をなすテーマとなっている。そのすぐ内側の枠BとB'はイエスの業についてのイエスの語りである。「父からの」、だからその意味で「善い」、イエスの業が次のテーマとなっている。V32でイエスは業こそ注目されるべきことを主張され、V33で「ユダヤ人」たちは業ではなく人物の判断が先行するのだと切り返す。われわれが以前から出会っている対立

構造がここでもまた出現している。こうしてCとC'の枠では「イエスとは誰かを言うこと」が「神冒瀆」であるのか否かが焦点となっている。これがまた次のテーマである。C'は「イエスの業」の内部(テキスト上の配置もそうになっている!)に秘められた奥義である(したがってこの「C'が信じられなくても」とB'は述べるのである、「わたしの業を信じなさい」。A-A'がソロモンの回廊ならB-B'は神殿本体, C-C'は至聖所である。

以上すべての枠によって包まれ、契約の箱のようにして安置されているのは、**書かれて**いるものの枠組(D)であり、その中に、神の決定的な語りかけの言葉とこの言葉に対するイエスの解き明かしが納められているのである。二本の発話提示語[εἶπεν]のアオリスト形(真理を報告する用法)での言葉の導入を含め、7,37-39での最初のσχίσμα出来場面と全く同じ構造が出現している(拙論『分割』第1章第2節)。

真理を報告する用法[εἶπεν]がV36に記述してあることによって視像的にも鮮明に示されているように、イエスの「わたしは神の子である」の言葉が、「書かれたものの世界」〈から外へ〉出たのであること(これに対し7,37-39では、「信ずる者たちの世界」〈の中へ〉、神の言葉がイエスの発話内行為によって届けられたのである)、逆にイエスのこの言葉が〈そこから外へ〉出たことによって反照的に、「あなたたちは神々である」との神のかつての言葉が浮かび上がり、むしろ初めて現実態となったことが示されている。

詩編82,6を解き明かすイエスの語られ方に注目しよう。

10:35 あの人たちのことを彼は**言った**のである、「神々」と。 10.35 εἰ ἐκείνους **εἶπεν** θεοὺς

その人たちに向けて神の言葉が**語りかけられた**ところの πρὸς οὓς ὁ λόγος τοῦ θεοῦ **ἐγένετο**,

V35aを注意深く読むとき、彼(=神)が『神々』と語られたのだというこの事実の指摘の仕方には、「神の言葉」が「語りかけられた」という聖書の言葉の中に、「あの人たち」と「彼」との間に掛け替えもなく貴重な我・汝関係が極限的に現出したことをイエスは聞き取られたのだということが表現されている。それはちょうど、申命記34,1-6の申命記史家の語り口が、あたかもモーセに対する神の激情を映し出すかのような表現となっているのに似ている。

ἐγένετοをわれわれは(12,30で「声が聞こえた」と聴覚言語で訳しうることも踏まえ、聴覚言語で「語りかけられた」と訳す。しかしἐγένετοとは著しい言葉である。「その人たちのために(πρὸς!)神の言葉が成った」とさえここは訳しえるのであって、そうするとこれは1,14に直結する。1章にはἐγένετοという三人称単数第二アオリストの形は7回も出現している(γίνομαιの全用例は51,その内1章に11)。前節でわれわれは詩編82を読むに当たりまず6-7節の外枠を消去した。今やこの両節はプロローグの背景の中に入れて読むことが求められているようである。差し当たり1,10-14をbackgroundとしてみよう。

1:10言は世にあった。世は言によって成ったが ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, 世は言を認めなかった。

1:11言は、自分のものたちのところへ来たが εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, 自分のものたちは受け入れなかった。

1:12しかし、自分を受け入れた人たち、

言は与えた、その人たちに、神の子となる資格を ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι,
つまりその名を信じる人たちに。

1:13この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、

神によって生まれたのである。ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν

1:14言は肉となって、宿られた。Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ ἐσκήνωσεν

わたしたちの間に ἐν ἡμῖν

わたしたちはその栄光を見た。

それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

われわれは各行を4段の高さの区別を使って記述したが、第4段は信ずる者たちの「外」である。第2段は信ずる者たちの集まりであり、第3段は「その中」に示現している出来事である。

1,10-14の範囲を background にして詩82,6-7を聞き直してみると、まさに(詩の左の箇所引用である)ヨハ10,35a はプロローグのこの箇所と激しく共鳴しあっていることが確信されよう。

その人たちに向けて神の言葉が語りがけられた[ἐγένετο],

とはまさに上の第3段の内容と一致する(第3段を通覧されたい)。

さて上掲引用部分(10,31-39)全体のテーマの系列の頂点は「父と子の相互内在」の実現、そしてそれは「知ること」の次元でも、この相互内在を「知るに至り知り続ける」という、「知ること WIII」の確立である。しかし決して見落としてはならないことがある。

「ユダヤ人」による神冒瀆との弾劾(C)は、彼らの思いでは、「人間でありながら神との一致においてある」と称する者はイエス一人であった。彼らはまさにそのことを攻撃したのであった。そしてイエスは自分のことを「神の子である」とくもう一度語られた(C')。しかしそれはある重大なテーマへと迂回した上での解答なのであったのである。イエスが「神の子である」とは今度は、「人間でありながら神との一致においてある」のは「今や、わたし一人ではなく、一つの群であり、わたしはその群の先頭にいるのだ」という現実態をすでに生み出したということ(D)、父の御心を遂行するという「神の子たるの実」を、そのことによって示し終えたのだということ、このことを意味するものとなっているのである。「ユダヤ人」たちは自らの弾劾の言葉に対するイエスからの応答として、自分たちの主観的に思いなした「許されざる行為」を、遙かに凌駕し圧倒する真実相を呼び出し、これに直面させられるはめに陥ったのである。

「ユダヤ人」たちの狼狽をしりえに、「神の言葉が語られた人たち」(10章末)、そして彼らを内に包む一つの群、つまりイエスの羊たちであるが故に「羊飼いの声を聞く」人たち(10章冒頭)の群は、地上を粛々と歩みつつある、かに見える。

しかしこの群は群の頭を喪失するという危機に脅かされているのである。

補論 盲人で生まれた人の新たな生誕

拙論『構成』第2章第1節でわれわれは9章の内部構成を確定する際、「C 両親の査問」の項に子殺しが記されていることを指摘し、「A しるし αα」の項が通常の治癒奇跡を物語るものではないと述べておいた。ここに何が語られているのかを補論として述べ、9-10章の全体像を展望する視野をもう一つ追加しておく。

あの癒やされた人が住む社会においては、盲人として生まれた者とは、神の完全性を汚し神に逆らう忌むべき存在と見なされていた。その彼が見えるようになるとは——この偏見の体系の中核たる宗教指導者の地平からは——、異様の上にさらに異様が重ねられた妖術的な作用の発現として、それはありうべからざること、地上から速やかに取り除いて悪霊的なものの伝播を防ぐべきことと、考えられたことであろう¹³。

あの「両親の査問」の段を読み進むとき、もし読者が「癒やされた男はこの場に残っていただろうか」とふと疑問に思ったとしたら、読解作業はテキストの戦略と連動し始めたのである。権力の締め付けが厳しい社会にあって(V22-23参照)、権力者からの査問に対して自分の両親が(彼らの身を守るために)テキストに記述されているような言辞を吐くのを目の当たりにしたら本当に切なくやりきれないことだろうと思う想像力、こういう類の活きた想像力との呼応をテキストは求めているからである。この呼応の直中で、まさに権力の圧力に潰された両親による子殺しがテキスト上に出現したのである。弾圧・迫害あるいは共同体や家族の保守的拘束力の根深さに対する読者の想像力のあり方に応じて、この子殺し事件は多様な深みを孕んで立ち上がる。苦い思いのうちに、先行する親殺しさえも眼前髣髴と浮き上がってくる読者も多いだろう。様々な切り口を開示する様々な含みをもつこのエートス面での子殺し事件をテキストはどの方向に統御しようとしているだろうか。その観点からテキストの前方を再読するとわれわれは直ちに気がかりな一文に出くわす。

わたしがそうなのです 'Εγώ ειμι. 9,9

ヨハネ「福音書」で特筆すべき鍵言葉 'Εγώ ειμι がこんな所に書き込まれているのである。盲人として生まれた男が共同体の権力の圧迫の下に、自分を生んだ両親の言葉によって殺されたのである。その者が「わたしはある 'Εγώ ειμι」と端然と語り切っているのである。——すでに拙論『構成』第2章第1節で見たように癒やしの奇跡物語では、癒やされた者は癒やしの「客

体」に留まるのであって、その枠内で「主体的行動」をとるとしても、わが身の癒やされたことを言いふらすか、あるいは癒やした者イエスを褒め立てるかである。癒やされた者が自らのアイデンティティーを、むしろ自らがあるということを、公然と口にするということは、通常の奇跡物語の文学形式にはあり得ないことである。まるでここで主張されていることは、——あるひとりの男がいてその身体の一部（目）の病が癒やされたということが問題である以上に——その男の存在そのものこそが問題なのであるということのようである。

テキストから9,9を含む一単位を取りだしてみよう。「両親の査問」の場面で明らかになることであるが、「しるし $\alpha\alpha$ 」の総括視点は〈癒やされた者のアイデンティティー・癒やしの業の方法・癒やした者のアイデンティティー〉の三点である。こうして9,9は広義には上記三つの視点全体を扱う V8-12に、狭義には第一の視点を提示する V8-9に、含まれていることとなる。まず後者から見ていこう。

^{9:8}近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が言った。

「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と

^{9:9}ある人々は言った、「その人だ」と、ある人々は言った、「いや違う。似ているだけだ」と。

本人は、「わたしがそうなのです」と言った。

9.8 Οἱ οὖν γείτονες καὶ οἱ θεωροῦντες αὐτὸν τὸ πρότερον ὅτι προσαίτης ἦν ἔλεγον, Οὐχ οὗτος ἐστὶν ὁ καθήμενος καὶ προσαιτῶν;

9.9 ἄλλοι ἔλεγον ὅτι Οὗτός ἐστιν, ἄλλοι ἔλεγον, Οὐχί, ἀλλὰ ὅμοιος αὐτῷ ἐστίν. ἐκεῖνος ἔλεγεν ὅτι Ἐγὼ εἰμι.

発話主体群衆・提示者著者の λέγω 未完了過去, ἔλεγον を重ねるヨハネ愛好の表現をわれわれは「分裂提示の λέγω」と呼ぶが、これは7章(7,12.41)でも9章のこの後(9,16)でも、「主役・イエス」がどういう方であるかをめぐって「脇役・群衆たち」が立てる評判・噂を(肯定否定の対立の内に)伝える形式なのである(12,29では「天からの声」に対する群衆の判断)。例えば次のように語られる。

^{7:12}群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。

ある人々は言った「良い人だ」と、他の人々は言った、「いや、群衆を惑わしている」と。

7:12 καὶ γογγυσμὸς περὶ αὐτοῦ ἦν πολλὸς ἐν τοῖς ὄχλοις·

οἱ μὲν ἔλεγον ὅτι Ἀγαθὸς ἐστίν, ἄλλοι [δὲ] ἔλεγον, Οὐ, ἀλλὰ πλανᾷ τὸν ὄχλον.

この形式自身によって、癒やされた人がイエス(あるいは「天からの声」)に準じる地位を与えられた存在であることが伝えられているのである。9,9の Ἐγὼ εἰμι は決して軽く見過ごすことは出来ないのである。次にこの Ἐγὼ εἰμι が広く「総括部全体」V8-12という単位に含まれ

るものとして考察をすすめよう。

Ἐγώ εἰμι に激しく共鳴するのはこの単位最後の V12 Που̇ (どこ) である。この語のヨハネ神学における意味を背景に退けたままであってさえも、読者が「シロアムの池は？」と思い始めたとともに想像力は強く湧出しはじめる。その過程で読者が結局気付かされるのは、むしろ「この男は〈どこから〉来たのだったか」をテキストが想起させようとしていることである。

この目でこの章を最初から再読してみる。

男は実にドラマの最初から舞台にいたのだった。彼はイエスの目に止まり、弟子とイエスの問答の間中、黙ってイエスたちの前に座ったままであった。イエスから(普通の癒やしの奇跡物語とはまるで違って)何の声掛けもなされず、彼はただ目に泥を塗られるに任せていたのである。「行って洗いなさい」というイエスの言葉に従って彼は出て行く。全くの受動! こうしてはじめから影のように舞台に座っていた男は V7 になって舞台から退去した。次に彼は再登場する、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」の声。この瞬間われわれは気付く、男が一旦舞台から退いた後次に舞台にもどってきた時、この時には彼はすでに主役となっていたのだったのだと。群衆の「これは！」というあのせりふに始まる言葉の掛け合いは、様変わりした主役を囲む脇役たちの驚嘆の波紋なのであった。彼は帰ってきた、〈別人のようになって、生まれ変わって〉。われわれのこの言い回しが孤立して読まれるなら〈生まれ変わって〉の方が比喩にとどまるかも知れないが、「両親の査問」の段の子殺し事件との反照のなかで読まれるなら、〈別人のようになって〉の方が比喩であり〈生まれ変わって〉の方が真実となる。

この男は〈どこから〉この舞台にもどってきたのだったか? イエスに「唾で土をこねて」(マルコ8,23, 創世記2,7:神)それを目に塗ってもらい、『遣わされた者』(聖霊, イエス, 教会, 弟子)という意味のシロアムという名の「池」(聖霊)に行ってその目を「洗って」(洗礼)来たのである。しかも彼はイエスの「言われたこと」を少しも曲げずそのまま実行した(V11)のである。「生まれつきの盲人」,「盲人として生まれる」に注目すれば、「対ニコデモ対話」のイエスの言葉が現実化され展開されていることが歴然とする(ニコデモの「どうして!」も思い出される)。男は父・子・聖霊の名によって洗礼を授けられ、「新たに生まれて」(3,3-8)帰ってきたのであった。

そして彼の古い人間は水に沈んで死んだのみではない。解釈意志としての「どうして」(本小論第1章第4節)が、結局は古い共同体の支配意志を体現するにすぎないひとつの様態である限り、素朴な庶民の「どうして」の問いかけも権力中枢の「どうして」の高圧的な尋問に統御されるのであり、癒やされた人はこの「どうして」の集中砲火の中で、権力、家族の歴史、一親等尊属によってエートス面で引き下げられ沈められたのである。

こうして確かに、彼は迫害の中で洗礼のプレーローマを迎えたとテキストは伝えているのである。

参考文献

- 荒井/マルクス：ギリシア語新約聖書釈義事典 I, II, III Exegetisches Wörterbuch zum Neues Testament hrsg. v. H. Balz u. G. Schneider 教文館 1993-95 (*Exeg. Wb*)
- Bauer W: Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur (hrsg. v. K. u. B. Aland) Walter de Gruyter 1988 (= *Wb*)
- Blass F, Debrunner, A: Grammatik des neutestamentlichen Griechisch (bearb. v. F Rehkopf) V & R 1990 (= Blass/ Debr)
- Koehler L, Baumgartner W: Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum Alten Testament in 2 Bde (neu barb v. W. Baumgartner, J. J. Stamm u. B. Hartmann) E. J. Brill 1995 (=Koe/ Bau)
- Brown R E: *The Gospel according to John* I 1966, II 1970 Doubleday (= *John*);
- 松永希久夫：「ヨハネによる福音書」注解『新共同訳 新約聖書注解 I』日本基督教団出版局 1992 (=注解)
- Morris L: *The Gospel according to John Revised Edition* W.B.Eerdman 1995 (= *John*)
- Ridderbos H N: *The Gospel according to John A Theological Commentary* (trs. b. J. Vriend) W.B.Eerdman 1997 (= *John*)
- Schnackenburg R.: *Das Johannes-evangelium* I⁷ 1992, II⁴ 1985, III⁷ 1992, IV 1983 Herder (= *Joh*)
- Schulz S: Das Evangelium nach Johannens NTD Band 4 16.Aufl. V & R Göttingen 1987 (= *Joh*)
- Wilckens U: Das Evangelium nach Johannens NTD Band 4 17.Aufl. V & R Göttingen 1998 (= *Joh*)
- Augustinus: In Iohannis Evangelium Tractatus CXXIV Corvps Christianorum Series Latina XXXVI 1990 (= *Ioh*)
- Dodd C H: *The Interpretation of The Fourth Gospel* Cambridge University Press 1958 (= *Interpretation*)
- Beutler J and Fortna R T (ed.): *The Shepherd Discourse of 10 and its Context: Studies by Members of the Johannine Writers Seminar: edited with introduction by Johannes Beutler and Robert T. Fortna* Cambridge University Press 1991 (=Beutler & Fortna)
- Hammes A: *Der Ruf ins Leben Eine theologisch-hermeneutische Untersuchung zur Eschatologie des Johannesevangeliums mit einem Ausblick auf ihre Wirkungsgeschichte* Philo 1997 (= *Ruf*)
- Hergenroder C: *Wir schauten seine Herrlichkeit Das johanneische Sprechen vom Sehen im Horizont von Selbsterschließung Jesu und Antwort des Menschen* Echter Verlag 1996 (= *Schauten*)
- 伊吹 雄：『ヨハネ福音書と新約思想』 創文社 1994 (=新約思想)
- *Die Doxa Des Gesandten — Studie zur johanneischen Christologie* Annual of The Japanese Biblical Institut XIV 1988 (= *Doxa*)
- 加藤常昭：『ヨハネによる福音書講解説教 1, 2, 3』 1997-98 ヨルダン社 (=ヨハネ)
- 加山宏路：『永遠と汎時』 私家出版 1994 (=汎時)
- 加山久夫：『使徒行伝の歴史と文学』 ヨルダン社 1986 (=行伝)
- Langacker: *Concept, Image, and Symbol The Cognitive Basis of Grammar* Mouton de Gruyter 1990 (= *Concept*)
- Martin J: *History and Theology in the Fourth Gospel Revised and Enlarged* Abingdon 1979 (= *History*)
- J・ルイス・マーティン著/原 義雄・川島貞雄訳：『ヨハネ福音書の歴史と神学』 日本基督教団出版局 1984
- 並木浩一：『旧約聖書における社会と人間——古代イスラエルと東地中海世界——』 教文館 1982 (=旧約)
- 『ヘブライズムの人間感覚〈個〉と〈共同性〉の弁証法』 新教出版社 1997 (=人間感覚)
- 野家啓一：『言語行為の現象学』 勁草書房 1993 (=言語行為)
- 大貫 隆：『福音書研究と文学社会学』 岩波書店 1991 (=文学社会学)
- 『マルコによる福音書注解 I』 日本キリスト教団出版局 1993 (=マルコ)
- 『ヨハネによる福音書 世の光イエス』 日本キリスト教団出版局 1996 (=世の光)

- Schweizer E: *Ego Eimi Die religionsgeschichtliche Herkunft und theologische Bedeutung der johanneischen Bildreden* 2.Aufl., V & R Göttingen 1965 (=Ego eimi)
- Jesus, das Gleichnis Gottes Was wissen wir wirklich vom Leben Jesu? 2.Aufl., V & R Göttingen 1996 (=Gleichnis)
- 佐々木寛治: 『メタファー過程に寄せて』 川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994 (=過程)
- 『十字架上のメタファー』 川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994 (=十字架上)
- 『「わたしを見たから信じるのか」——ヨハネ「福音書」における交錯配列法の光の下での θεωρεῖν』 中国短期大学紀要 第28号 1997年 (=セオレーン),
- *Zur Exegese über Joh. 8,52-53 (eine Resümee)*
- *unter dem Licht des Chiasmus und der Architektonik im Johannes- „Evangelium“*
- Kawasaki Igakkai Shi Liberal Arts & Science Course No 23 1997 (=Joh. 8,52-53)
- 『イエスのエイドーとマリアのエイドー——ヨハネ「福音書」11章28-37節の提示語分析』 中国短期大学紀要 第29号 1998 (=エイドー)
- 『ヨハネ「福音書」9-10章の構成——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 λαλεῖν [I-1]—』 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=構成)
- 『分割する言葉——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 λαλεῖν [I-2]—』 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=分割)
- 『羊たちは彼の声を聞く——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 λαλεῖν [I-3]—』 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=聞く)
- 『フォース カイ ポース 光を恵まれた者における言葉の生成——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 λαλεῖν [II]—』 川崎医学会誌一般教養篇第24号 投稿希望論文発表会口頭発表・原稿提出断念 1998 (=フォース)
- 『術語 λαλεῖν の周知の諸起源——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 λαλεῖν [III]—』 中国短期大学紀要 第30号 1999 発表予定 (=諸起源)
- 関根正雄: 『関根正雄著作集第一巻 詩篇注解(中)』新地書房 1988 (=詩篇)
- 『関根正雄著作集第一六, 第一七巻 申命記講解(上, 下)』新地書房 1989 (=申命記)
- 土戸 清: 『ヨハネ福音書研究』 創文社 1994 (=ヨハネ)

¹ この現在終末論の枠組みのもと、10章に術語 φωνή は5回出現する。続く11章にそれはたんに1回しか出現しないが術語 φωνή がここで軽視されているわけではない。周到に準備され凝縮された唯一の場面、11章のラザロの墓の中への φωνή を、10章の全5回の使用が準備したのである。そして同様にまた、10章での φωνή を準備するものとして、9章で2回、発話提示語 φωνεῖν (この単語を構成する φωνή に注目!) が使用されていたのである。

術語 φωνή はヨハネ「福音書」全体で計15回使用されている。そのうち5章、10章、11章にそれぞれ3回、5回、1回出ている(他に3, 12章にそれぞれ2回、1, 18章にそれぞれ1回)訳であるが、その祝福/呪いの二肢的意義が行為として実現するフレームにおいては、我・汝関係とそれに基づく救いのための呼び出しという二つの契機が重要であった。この含意を前面に出した φωνεῖν の用例が上掲10,3に出現し、あと11,28に2回、12,17に1回出現するのである(われわれはこれを「声掛けをする」と訳す。それは復活顕現のイエスが「聖霊を受けよ」と息を吹きかけられた20,22のに似て、「声を掛けて命を吹き込む」という意味であり、そのようにして命へと呼び出す行為をも表している)。10章の φωνή を準備する9章の φωνεῖν の2回の用例は、「裁きの場へ呼び出す」という語義のものである(他に18,13。この語義が「救いのための呼び出し」という意味へと継承されている。因みに φωνεῖν の残り6例は、「鶏が鳴く」、「人を何々と呼ぶ」の4回を除けば1,48,2,9に出ている。1,48もまた命への呼び出しの語義で使用されている)。

² この箇所はイエスの降下・上昇の道のりを象徴的に表現する7章中央の交錯配列のなかで、降下されたイエスが十字架に架けられる直前に位置している(拙論『分割』補論参照)。V27と V28b-ca との関係に注目されたい。V28a が割り込んでいることが決定的に重要である。錯綜した内容を理解するために、認知言語学者が好んで使う図解に励まされて、次のように記述してみよう。

7:27 しかしこの人は、 わたしたちは知っている、 どこからで彼はあるか
 しかしメシアが 来られるときは、
だれも知らない、 どこからで彼はあるかを。」

7:28 叫んだ、すると、神殿の境内で教えていたイエスは、言うには。
 「またわたしを あなたたちは知っており、
 そして、あなたたちは知っている、どこからでわたしはあるかも。
 つまり、わたしは自分自身から来たのではなく、
 そうではなく真実におられる方は、わたしをお遣わしになった方なのである、
 その方を あなたたちは知らない。」

7:29 わたしは知っている、
 その方を。
 なぜならその方からでわたしはあり、
 またその方が わたしをお遣わしになった方からである。」

7.27 ἀλλὰ τοῦτον οἶδαμεν πόθεν ἐστίν·
 ὁ δὲ Χριστὸς ὅταν ἔρχηται· οὐδεὶς γινώσκει πόθεν ἐσθίν·

7.28 Ἐκραξεν οὖν ἐν τῷ ἱερῷ διδασκῶν ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγων, Κάμῃ οἴδατε πόθεν εἰμί·
 καὶ οἴδατε καὶ ἀπ' ἑμαντοῦ οὐκ ἐλήλυθα, ὁ πέμψας με, ἰμεῖς οὐκ οἴδατε·

ἀλλ' ἐστὶν ἀληθινὸς ὁν ἰμεῖς οὐκ οἴδατε·
 7.29 ἐγὼ οἶδα ὅτι παρ' αὐτοῦ εἰμι·
 αὐτόν, με ἀπέστειλεν·
 κακείνους

中央の柱は地上であり、左の柱は天である。中央の柱は、前半では人々の見る知る οἶδα 働きと、その眼前にイエスが おられる ということ、この両者の向かい合いで成り立っている。また前半では左の柱はフォーカスの外であり、右の柱こそが、中央の〈図〉を包み込む暗い〈地〉(どこから?の背景)として重要である。後半は、前半の中央の柱での人々とイエスの向かい合いに対応するものが左の柱で、イエスを遣わされた方とイエスの向かい合いとして示されている。この向かい合いを中央の柱にとどまる「あなたたち」は「知らない」のである(後半では中央の柱は左の柱を引き立てる〈地〉である)。全体を通じて、中央の柱には上の行から下の行へ向けて三つの次元で「知ること(見ること)」が出現している。肉の目で見る次元、臨在を霊の目で見る次元、天を見る次元(不可能として)。

われわれは V28b を疑問文とする読みの可能性を否定し、V28a ἐκραξεν に(神殿境内というセッティングの意義を重視し) 神の声のデユナミスを考え、さらに、V27b の「メシアが来るとき」と V28ca の「わたしは来た」との「来る」が、同じ動詞 ἔρχομαι の前者では接続法現在で、後者では第二現在完了で表現されていることに注目する。そうするとわれわれは不可避免的に、V28b-ca に立たれているイエスは父のもとから到来された人の子・イエスの臨在以外ではありえないと受け止めざるを得ない(V27ではそれが肉の目でのみ見られているに過ぎず、V28b のイエスの発言は霊の目で見れば「あなたたちはわたしの〈誰〉と〈何処から〉を知っている οἶδα している WII³、知らないのは天における父子関係 WIII である」ということなのである。弟子たちは意識していないがイエスから見れば彼らはイエスの〈何処へ〉をすでに οἶδα してしまっているのだと断言されている言葉は 14.4 に出現する)。さらにこの次元を突き抜けて V28cb 以下は、この臨在と遭遇という緊張関係を下に見下ろす、白熱した不二の父子関係そのものである。ここで「知ること」の論に帰れば、V27は「イエスの生まれも育ちもわかっている」という WI であり、同じ「知っている οἶδα」を使用している 28b-ca は「子の内なる父」を見る WII³、V28c 以下の左の柱は「父と子の相互内在」を知る WIII である。

³ 人の子イエスが到来されて、そういう方として眼前に臨在され父からの業をなされていることを知ること—

—そのことによってこの業がイエスの言葉に示現した神の声のデュナミスを指し示す—,それは「子の内なる父」の契機であり,これだけが切り離されるなら「下からのアナログア」である。「先在,あるいはわれわれのいう「先・形態 Prä-figurierung」の父と子が「父のうちなる子」の契機であり,両者のいわば同軸無限回転の相における「知るに至り知り続ける」「知ること」が、「父と子の相互内在」を「知ること」WIIIである。

- 4 10,34の「君たちは神々だとわたしは言った」という詩編82,6(こちらは明らかに「皮肉」である)の引用を,イエスの皮肉な語りとして理解する読解はどうしても成功し得ないように思われる。「神の言葉が語りかけられた *ἐγέβετο*」人々を神が神々と呼ばれた以上,イエスをご自分を神の子と言われるのは当然だという論理構成,この前提部に皮肉が込められている限り,この論理は上滑りした無謀な議論のように聞こえてしまう。しかしそれは,ちょうど7章のすでに言及したあの一見強引すぎるレトリック

A イエスはメシアではないのか

B しかしわたしたちは彼の出身を知っている

B' あなたたちはわたしの出身を知っている

C わたしはある方から遣わされた者である

と同様,信仰の高い勢位においては一貫した意味を保持しているものと受け止めるべきであるとわれわれには思われる(NTDのSchulz版はその方向で解釈し,Wilckens版はそれを継承するが,前者の教会論的拡大解釈には関与せずの態度をとっている)。表面レベルで受け止めれば「神の子」の下位に立つ「神々」と名付けける「人間たち」がいたのかという議論が出かねないことが,解釈者たちには危険と考えられて来たということもあろう。しかしわれわれは,*ἐγέβετο* という術語がプロローグの内容を強烈に喚起していることを思うならば,そして特に1,10-14の文脈をその内の*ἐγέβετο*をベースにして読めば,詩編の(死を運命づけられている)「神々」が引用されたとき,この語がプロローグの文脈の「神の子たち」(彼らが殉教の死を迎えるということも含め)を喚起していると考えられることができると思われる。この「神の子たち」と「すべてのものよりも偉大」なもの(10,29)とは同義であろう。いずれにせよここでのSchulzの所論からわれわれが継承したく思うのは,「父と子の〈再〉一致」の〈再〉において,人間の共同性(教会として)が父との存在の同型性(神からの存在という意味でのそれ)を獲得したものとして「上げられた」のである,という方向への解釈可能性である。

- 5 Sasaki K: Joh 8,52-53 1997 83-86

- 6 拙論『分割』第2章第1節参照

- 7 寓喩的思惟に「墮する」ことを嫌って,ここを寓喩と認めまいとする必要はない。原始教会から寓喩的思惟に移っていく全体の流れの一つの水路にヨハネ共同体の言語世界があり,この世界の言葉を組み入れて「神の言葉」が現臨しているとわれわれは考える。Vgl. E.Schweizer Gleichnis 91

- 8 読者の中にはわれわれが行うこの操作を,ヨハネ文書の内容を幼稚化する許すべからざる行為と考えられる方もおられよう。われわれはヨハネ「福音書」のドラマ的性格を,舞台上の上演場面をも髣髴とさせるものとさえ感じている。拙論『セオレーン』執筆時に,舞台上の主役,脇役,コーラスの位置を探る目的で,テキスト表面上の行から下の行へと時間が流れているとして,左右には例えば左側にコーラスの発言部,中央に主役の発言部があるとしてまとめてみることによって,いわばサウンドのステレオ化を図ってわれわれは,多くの発見を得たのである。われわれとしては,われわれの現在行っている操作は,木に強引に竹を接いだものではなく,ヨハネの文体の何かに適合する部分をすこしは持っているものと考えているのである。

- 9 E. Schweizer Ego eimi 150

- 10 E. Schweizer もこの2カ所に鋭く注目している Ego eimi 144 Anm.20

- 11 並木浩一『人間感覚』305 なお出エジプト24,10-11のヘブライ語本文とLXXのギリシャ語訳との間で「見る」ということに関して内容上のズレがあるが,このズレがマルタとマリアの信仰の落差へと重ね合わせられていることについては,参照拙論『エイドー』199-200

- 12 動詞 *ἀρπάξω* は6,15:10,12.28.29に出現するのみであり,10,28.29の意味するものが何であるかは10,12からわかる仕組みとなっている。明らかに殉教である。その否定形の強調はマタイ10,28の「魂は殺すことが出来ない」の否定形と同じ響きを持っている。6,15の用例は一見別物のように見える。しかしイエスを捕らえ十字架へ上げた者たちは「王」という罪状書きを掲げ首を振り振りわめきながら群をなして,イエスを追い立ててゴルゴタの坂を上って行ったのである。

動詞 *ἀρπάζω* は十字架に深く関係づけて使用されている。全26の用例中,イエスの遺体を「取り降ろす」,「取り去る」,「引き取る」に6回,イエスの,あるいはラザロの墓の「石を取り去る」に3回,イエスを殺すために「石を取る」,「殺せ」十字架に付けると叫ぶのに3回使用されている。10,18と17,15とはそれぞれイエス,

弟子たちの死を意味している。そしてさらに、「世の罪を取り除く神の子羊」1,29と、目を「あげて」父よと語られた11,41という例、ならびにイエス喪失の後に訪れる喜びは「奪われない」（これには殉教した信徒が肉を殺されても共同体から奪われるのでないという意味も関係していよう）15,2の用法、これらも別の観点から十字架を指している。10,24はイエスを十字架に架けた（そして彼に従う者を殺した）者の口にヨハネが入れた痛烈な皮肉である（以上18例）。すると物語の終わりの方での「殺せ $\acute{\alpha}\rho\omicron\nu$ 殺せ十字架に付けろ」の $\acute{\alpha}\rho\omicron\nu$ の叫びと、物語の始めの方でイエスが語られた「床を上げよ $\acute{\alpha}\rho\omicron\nu$ 」（5章に5回連続して出現）とはその印象的な響きの中で深い対応を宿している。ヨハネは5章のイエスの癒やしの言葉の中に「わたしの死を越えて、十字架を背負って歩み続けるように」との励ましを聞いているように思われる（以上の概観に取り上げなかった用例は2,16：11,41：11,48）。

- ¹³ 「ラザロ殺害」の動機12,10-11はたんに政治的なものに過ぎないのではなく、自らの信仰の原理そのものに反する存在はあってはならないとする宗教エートスに根ざすものである。鬼子概念の極端化された何かとして、共同体は自己の存立のために、どれほど多くの生命をその出生と同時に摘み取ったことだろう。